
秘密

チョコラッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘密

【Nコード】

N9361Q

【作者名】

チヨコラッコ

【あらすじ】

刑事（野瀬健吾）と姉の事件をきっかけに知り合った妹（氷川雪乃）。雪乃の過去・現在、そして雪乃の秘密を2人が共有する。記憶喪失となった雪乃が記憶を取り戻し、野瀬と雪乃がお互いに必要な存在だと気がつくまでの淡々とした大人のラブストーリー。

記憶喪失

雪乃は寂しそうに笑いながら言った。

「お願いがあるの。」

ベンチから立ち上がり、ゆっくりと振り向いて泣きそうな大きな瞳でまっすぐ野瀬を見つめた。

「あなたに、私の秘密を共有してほしいんだけど、お願いできるかしら？」

ベンチを見つけ腰を下ろし、煙草を思いっきり吸って一気に吐き出す。

ふと、さっきまで自分が居た病室を見上げた。ここから見る病室は緑の木々が光を反射しとても明るく、

笑い声さえ聞こえる。先ほどとは大違いだ。

1時間前、彼女の意識が戻ったと知らされ俺は、仕事場を飛び出しあの病室向かった。久しぶりだった。こんなにも全速力で走ったのは。病室の入り口で足を止めた俺の視線の先に目を開けた彼女がベッドに横たわっていた。カーテン越しの光が当たった彼女の頬は以前より少し痩せてはいたが、くせのある長い髪、茶色かった大きな瞳、血色のいい唇は一ヶ月前と何も変わってはいない。

ベッドの傍らには白衣姿の医者と両親がいた。

「雪乃。大丈夫か？」

父親が彼女に声をかけた。しかし、彼女は反応しない。まっすぐに白く高い天井を見つめていた。

何かがおかしい。俺にも何となくわかった。なんだ？そう自問自答し、一歩病室に足を踏み入れたときだった。彼女の視線が父親に注

がれ、小さく口を開いた。

「どなたですか？」

病室の空気が一変したのが全身で分かった。

「身体に異常は見られません。一時的なものだとは思われますが、何か大きなショックを受けたのでしよう。記憶を失っておられます。何時回復するか、はつきりとは断定できません。もう少し入院して様子を見てみましょう。」

俺は刑事になって6年、たくさんの事件を追い、数知れない人と一時的な出会いがあった。人との付き合いは正直得意ではない。世の中にはどれだけの人間がいて、自分の人生にどれだけの人間が関わっているのか興味もないし、知りたいとも思わない。仕事だと割り切ってこそ、事件を解決したいと思えばこそ人と接するのみ。ただそれだけだ。親と兄貴、数えられるくらいの親友、信頼できる同僚くらいが俺の目にまともにも映る人間。彼女なんかももちろんいない。女という存在は面倒臭いと思えない。

31歳になって彼女もいない俺をまわりは心配する。同僚は早く結婚しろと急かす。刑事という職業のせいだということは十分に理解はしているのだ。何か事件があれば何日も職場に泊り込み、出会いなんかなかない。それでもいいと思ってきた。仕事の充実感と自分の自由な時間さえあれば俺は十分満足だ。それが俺の人生であり、これからもその考えは変わらない。そう思っていた。彼女に出会うまでは。

もう一本煙草を吸おうか迷って、いや、やめておこう。ポケットにしまう。もう一度病室を見上げた。

「くそっ」

何かかもやもやする。事件を解決できない時とは違う、くやしい？ つらい？、いや違う。まわりから無表情とか感情表現が下手だとはよく言われるが、決してそうではない。俺は、悔しいことは悔しい、

嬉しいことは嬉しい、ちゃんと感じられる人間だ。こんな晴れた青空だって気持ちいいと感じられるのに、今俺の中で起こっているこの感情を一体何と表現すればいいのか。しかし、原因は分かっている。こういうもやもやは嫌いだ。

原因が分かっているなら、自分で解決したらいいだけの話だ。確かに今までの問題とは少し違うようだが、今までもずっとそうしてきたんだ。今回だって同じことだ。そう自分に言い聞かせながら足早に病室へ向かった。ドアを開けると彼女が一人ベッドに横たわっているだけだった。俺はゆっくりと近づいた。人の気配を感じたのか、彼女はゆっくりと目を開き俺を見た。

「貴方は、誰？」

彼女は小さな声で俺に尋ねた。

「気分は？」

彼女の質問になぜ答えなかったか、自分でも良く分からなかった。

「そうね。良いのか悪いのか良く分からないわ。」

「だろうね。一ヶ月も眠っていたんだから。」

彼女は少し目を開いて、そうなの？と言った。

「さつき、誰も言わなかったのか？」

「ええ。誰も言わなかったわ。みんな悲しそうな顔で出て行ったけど。」

一度下を向き、すぐ俺を見上げた。

「貴方は悲しそうではないわね。」

「じゃあ、どんな風に見えるかい？」

「そうね・・・。」

彼女はゆっくり目を閉じ、

「何だか、愛しいものを見るようだわ。」

そう言っただけ目を開き少し笑った。

彼女の言葉に一瞬息が詰まったが、俺も小さく笑い返した。

「そんなこと言っただけ恥ずかしくないのか？」

そう？彼女はキョトンとして首を少し傾けた。

「ねえ、お願いがあるんだけど。」

「なんだ？」

「外が見たいわ。」

OK。俺はそういって、足元のレバーを回した。

「ありがとう。」

「カーテンも開けようか？」

「うん。」

ガラス越しに外の景色を見て、彼女ははじめ眩しいのか大きな目を細めた。次第にゆっくりと元の大きな目に戻り、目尻を下げて微笑んだ。

「緑が綺麗。今は夏なのね。太陽が眩しいわ。」

「そうだな。久しぶり見る景色はどうだい？」

「うん。」

彼女は手を口元にもっていき、大きく息を吸った。

「不思議な気分ね。貴方が言ったように一ヶ月眠っていたのなら、眠る前も同じ太陽の光を見ていたはずでしょ？でも私は覚えていない。」

彼女は言葉を切り、じつと窓の外を見た。

「でも・・・」

彼女はそう言って、俺を見上げた。

「何だか落ち着くわ。貴方と一緒に見てるせいかしら？」

そう言って満面の笑みを俺に投げかけた。

「君は人を恥ずかしがらせるのが得意なんだな。」

チクリと胸の奥が痛んだ。彼女が記憶喪失だからか？それも確かにある。彼女と笑顔をみて、さっきのもやもやが何だったのか、この胸の痛みが何なのか。よく分かった。

「彼女の記憶の中に俺という人物がいたことを、彼女が忘れてしまったからなんだと。」

そして、

「俺と彼女しか知らない秘密を、今は俺しか知らないということ。」

「俺といて落ち着くなんて初めて言われたな。君は変わってるよ。でも、君から言われるとなぜか悪い気はしない。君だけは特別だ。何かあったら俺を呼べばいい。時間がある時は来るよ。」

「ほんとに？嬉しいわ。後で看護婦さんに電話番号を伝えて。」
彼女は本当に嬉しそうだった。

分かったよ。俺は手の平を少し高く上げてひらひらと動かした。

「そんなに嬉しいかい？」

「嬉しいわ。だって……」

彼女は俺を見て言葉を切った。

「そういえば名前を聞いてなかったわ。」

「野瀬だよ。野瀬健吾」

よろしく。俺は彼女に挨拶をした。さっきは答えられなかったが、何故か今回は抵抗がなかった。

「私は……」

「知ってるよ。氷川雪乃さん。」

俺は笑って頷いた。

彼女はチラッと俺を見上げ、ゆっくり視線を外に向けた。彼女の手がシーツをゆっくり掴む。

「ごめんなさい。」

彼女は小さな声でそう言い、唇を少し噛み締めた。

「貴方……野瀬さんは私のことを知っているのに、私はあなたのことを覚えていない。それどころか、自分のこともわからない。ごめんなさい。」

彼女は何度も俺に謝り、小さく息をついた。

俺は近くにある椅子をベッド脇に寄せて座った。彼女はいつも苦しんでばかりなのか。本当に……世の中は不公平だ。俺は自分の太ももを軽く叩き、謝らなくていいさ。そう彼女に言った。

「いいじゃないか。君が忘れていても、俺が覚えてる。俺だけじゃないよ。家族や友達もちゃんと君を覚えてる。一ヶ月前もちゃんと君が生きていた証拠だ。大丈夫さ。今は悩まずにゆっくり休めよ。」

自然と出た言葉に自分自身少し驚いた。

「そろそろ職場に戻らないと怒られるな。」

俺は時計を見て、さてと。と椅子から立ち上がった。

じゃあ、行くよ。俺は彼女にそう言っただけで病室の出入り口に向かって歩いた。

「ありがとう。」

背中から彼女の声が聞こえた。俺は手をあげてそれに答えた。

「ねえ！」

もうひとつだけ……。彼女が少し大きな声で言った。

「一ヶ月前の私は、幸せそうだった？」

彼女の不安げな質問に、今度は俺が彼女に見えないよう唇を噛み締めた。口元の力を抜き、顔だけを彼女に向け、

「ああ。」

笑って答え、病室を出た。少し歩いて立ち止まった。

「くそつ……。」

何に対して悔しいのかわからない。

俺は長い廊下をまた歩き出した。歩きながら心の中でもう一度君に答えた。

「いいや、君は幸せそうじゃなかったんだ……。」

出会い

新幹線の窓際の席から外を眺め、野瀬はふうつと息をついた。隣をちらつとみると3年後輩刑事の迫田は眠っている。こんな居心地の悪い席でよくもまあ眠れるもんだ。やれやれ・・・と息をついた。「これも若さなのか。」

野瀬はぼそつと呟いて、窓の外に視線を移した。少し雨が降ってきたのか窓に斜めの水模様が付き始めた。席を立ち、喫煙ルームへと歩いた。煙草に火をつけ、吸った煙を吐き出す。こんな風に煙草を吸いながら新幹線から外の景色を見るのも慣れてしまった。何か事件があれば事情聴取の為の新幹線移動。今回のように京都から東京までだったらまだ近いほうかもしれない。

4日前、父親から娘の捜索願いが出された。3人姉妹の長女の行方が分からないとのことだった。職場にも出勤しておらず、玄関先に仕事前のバックや財布などが置かれた状態だった。玄関のドアは鍵が掛かっておらず、私物の携帯電話は無く、連絡がつかないとのことだった。状況から見て、何らかの事件に巻き込まれた可能性は十分に考えられた。が、明確な確証無いことから、事件として捜査することが出来なかった。しかし2日前、女性は遺体で見えられた。すぐに対策本部が設置され、事件の捜査が始まったが、思うように情報が集まらなかった。彼女には2歳年下と7歳年下の妹がいた。7歳年下の妹は京都の実家におり、すぐに事情聴取ができたが、2歳年下の妹は東京で一人暮らしをしていた。

席に戻り、野瀬は資料を開いた。

「氷川雪乃・・・か。」

資料にもう一度ゆっくり目を通す。今から会う遺族の情報を頭に叩き込む為だった。これが野瀬流だった。

「先輩、また資料を見てるんですか？」

迫田はあくびをしながら資料に指を指した。

「先輩は人に興味が無いのに、事件となるといつもそうですよね。」
野瀬は横目で迫田を見た。

「おまえは俺とは逆だな。人に興味・いや、明確に言えば女に興味はあるが、事件となると興味がなくなる。遺族が女でもな。」

「確かに女性は嫌いじゃないですけど……。」
迫田はそう言つてまた目をつむつた。

「本当に良く眠れるやつだな。」

そう言つてまた資料に目を落とす。短大を卒業してからすぐに東京へ上京。年齢は29歳。

「俺と同じ年か……。」

資料に目を通し終わると野瀬はまた窓の外をじっと見た。さっきよりも雨脚が強くなっていた。まるで今から会う遺族の心中のようだな。野瀬は思った。これまでもたくさん被害者遺族と会ってきた。共通していることはみんな泣き、そして言う。早く犯人を捕まえてくれと。もちろんそれが俺たちの仕事であり、なすべきことだ。その為に、遺族の情報を頭に入れ、性格を読み、スムーズに情報収集ができるように努めてきた。

「しかし、いくら場数をこなしてもこればかりは慣れやしななさ。」
しかも同じ年の人間の事情聴取など、一番やりにくい……。相手が女ならなおさらだな。

野瀬は呟き、目を閉じた。東京着のアナウンスが聞こえ、大きく息を吸つて吐き、目を開けた。

「迫田、仕事だ。」

野瀬はそう言つて席を立つた。

「分かつてますよ。先輩、待ち合わせ場所は確かPARホテルでしたっけ？」

「ああ。」

「僕一度泊まったことがあるんですよ、学生時代に。有名ホテルみたいに豪華ではないんですが、なかなかいいホテルでしたね。彼女との初デートだったんですが……。」

そう言つて迫田はニヤけた。

やれやれ・・・野瀬はため息をついて言った。

「どの彼女だ？本命か？それともキープ1号ちゃんか？2号ちゃんか？」

「いやだなあ、先輩。誤解しているみたいだから言つておきますけど、僕は結構一途タイプなんですよ。まだ本命ちゃんとは出会っていませんけど。もちろん1号2号なんていませんし。」

「ああ、そうかそうか。そりゃ悪かった。」

野瀬は軽く謝った。

「それよりも先輩はなんで彼女作らないんですか。職業も公務員だし、ルックスだつて僕が言うのもなんですが、かなりいけてると思ふんだけどなあ。」

署内でも女性警官の間では結構噂の的なんですよ、羨ましい。迫田は楽しそうに言いながら野瀬の背中を軽く叩いた。野瀬は返事をする気もなく、足早にホームを歩いた。やはり東京は人が多い。周りを少し見渡しながら先へ進む。改札口を出てすぐにPARホテルの看板が目に入った。看板にかかれた案内表示に沿いホームを出ると外はやはり雨だった。売店でビニール傘を買い、ホテルに向かつて2人は歩き出した。ホテルは道路を渡つてすぐ目の前にあつた。なんて分かり易い・・・野瀬は苦笑した。これが彼女流の気遣いか。資料から遺族の性格を読むのは俺流だが、やはり見えない部分はたくさんある。こういうところで相手の性格を読む、これは以前コンビを組んでいた先輩流だ。

「先輩流もさすがに捨てたもんじゃないな。年の功つてやつか。俺もまだまだだな。」

また少し、彼女の性格が見えた。野瀬は信号が青に変わったのを見て横断歩道を渡った。迫田もそれについて少し後ろを歩いた。

ホテルのロビーに入ると野瀬はフロントの女性に声を掛けた。

「野瀬というものです。こちらのロビーで氷川さんという方と待ち合わせをしているのですが・・・。」

「はい。野瀬様ですね。氷川様からあちらの喫茶店でお待ちしますと伝言を預かっています。一番奥の席にありますとのことです。」

「そうですね。どうもありがとうございます。」

2人はお辞儀をして喫茶店に向かい歩いた。先ほどの迫田情報を軽く聞き流してはいたが、なるほど、悪くはないホテルだ。野瀬はそんなことを考えながらホテル内を見渡した。豪華ではないが清潔感あふれる内装、目を刺激しない程度の心地よい照明、ゆっくりと流れる音楽。

「ねえ、いいホテルでしょ、先輩。」

横を歩いていた迫田が小声で言った。

「ああ、お前の情報もたまには正確なんだな。」

「僕の情報はいつも正確ですよ。」

「わかった、わかった。」

野瀬は軽く迫田の肩を叩いた。

喫茶店の中に入り店内を見渡した。2人に気づいた接客の女性が近づいて来るのがわかった。

「失礼ですが、京都から来られた刑事さんですか？」

彼女は2人に尋ねた。京都から来た刑事と的確にいわれ野瀬は少し驚いた。

「そうだが・・・。」

「私、前田美里と言います。彼女、あ・・・雪乃の友達です。刑事さんが来たら案内を頼まれました。」

「そうでしたか。で、雪乃さんは？」

「あそこに座っているのが彼女です。」

そう言っただけで美里は店の一番奥の席を指差した。照明が少し当たりにくい奥の席に野瀬達に背を向け少しいつむき加減で座っている女性が見える。

「ありがとうございます。」

美里にお礼を言って雪乃のもとへ向かおうとした野瀬を美里が引き

とめた。

「あの……。」

美里はそう言っつて、野瀬を見た。

「何だ？」

「あの……、雪乃はお姉さんのことで本当に凄く落ち込んでいます。」

「ああ、そうだろうね。」

何を今さら、当たり前前のことを……。野瀬は少しイラっとした。

「ううん、そんなものじゃないわ。けど……いえ、そのことだけはちゃんと理解してあげて下さい！」

雪乃をお願いします。少し強い静かな口調で美里はそう言っつて軽くお辞儀をし、野瀬達に背中を向け店内の奥へと戻って行った。

「何なんですかね？今の。」

迫田は首をかしげた。

「さあな。行こう。」

野瀬と迫田は雪乃の元へ歩いた。彼女の傍まで来ると野瀬は後ろから声をかけた。

「氷川雪乃さんですね。」

野瀬の声に雪乃の肩が少しビクついた。少し間を置いて椅子から立ち上がるとゆっくり野瀬達の方へ向きを変えた。少し癖のある長い髪に茶色がかった大きな瞳、血色のいい唇がとても印象的だ。10人の男に綺麗かどうか質問すれば、おそらく9人は綺麗だと答えるに違いない。

「お姉さんの事件を担当している京都府警の野瀬です。」

「同じく京都府警の迫田です。」

「妹の氷川雪乃です。姉のことでは色々とお手数をお掛けします。そう言っつて深く頭を下げた。」

「いいえ、こんなところまで押しかけて申し訳ない。」

野瀬も軽く頭を下げた。

「雪乃さんもつらいだろうが、お姉さんのことで少し話を聞かせて

くないか？」

まあ、とにかく座つて。と野瀬は雪乃を座らせ、店員を呼んでコーヒ―を3つ注文した。

野瀬と迫田はバックから資料とノートを取り出し、テーブルの上に置いた。

「さて雪乃さん、お姉さんのことなんだが・・・」

野瀬が雪乃にそう問いかけた。雪乃は目を閉じ、テーブルの上に重ねた両手をぎゅっと握り締めた。

「最近のお姉さんのことで何か・・・」

「私っ・・・！」

雪乃は野瀬の言葉をさえぎり震えた声で言った。

「私は何も知らないわ・・・。何も知りたくない。」

心の孤立

正直、野瀬は参っていた。雪乃と向かい合い1時間経つが何を聞いても雪乃は知らないの一点張りだった。隣を見るとさすがの迫田も少しイラついた表情をしている。

「ここは禁煙だったかな？」

野瀬は雪乃に尋ねた。

「いいえ。」

雪乃はうつむいたまま呟くように答えた。

「吸っても良いかな？」

「どうぞ。」

野瀬は煙草に火をつけ、一息吸った。さて、どうしたもんか。このまま雪乃に姉のことを聞いてもらちがあかない。しかし、手ぶらで京都に戻るわけにもいかない。野瀬は煙草の火を消し、携帯を手に席を立った。雪乃が見えない場所まで来ると電話をかけた。

「主任ですか？野瀬です。」

そういつて電話の向こうの人物に時より頭を下げながら話をしていった。5分ほどで電話を終えるとホテルの天井を見上げ、ふうっと息をついた。ホテルの照明はやはり野瀬の目には優しくかった。息をつくとフロントに向かった。

「急で申し訳ないが、今日と明日、一人泊まることはできるだろうか？」

野瀬はフロントの女性に尋ねた。女性は宿泊名簿を確認し、大丈夫ですと答えた。宿泊者カードに記入を終え、喫茶店へ戻った。席に座るとずっと下を向いたままの雪乃に野瀬は声をかけた。

「今日は時間をとってもらってありがとう。疲れただろう。また、聞きたいことがある時は電話するけどいいかい？」

雪乃は小さく頷いた。

「つらいだろうが、ちゃんとご飯は食べてくれよ。君まで倒れたら

京都にいる家族に余計に心配をかけてしまつんだから。」
顔を上げて？野瀬はそう言って雪乃に笑いかけた。雪乃は少し顔を上げ、また小さく頷いた。

ホテルを出る雪乃を見送り、2人はまた喫茶店へと戻った。野瀬は空になったコーヒーカップをみて追加のおかわりを頼んだ。そして手を額に当てた。

「しかし、参りましたね。」

これじゃ、東京まで来た意味がない。迫田は追加のコーヒーに口をつけた。

「いつも能天気なおまえが、あんなにイラついた顔したのは結構見ものだったかな。」

「さすがの僕でもあれじゃ・・・ねえ。」

「いや、ああいう場面で苛立つお前は嫌いじゃないよ。」

そう言った野瀬をカップに口をつけたまま迫田は見た。それを見た野瀬は少し笑った。

「俺たちは刑事だ。こんな事件は情報収集が出来なければ前進はない。だろ？」

でも、お前はまだまだ若いな。野瀬もコーヒーを一口飲んだ。

「お前に刑事としての自覚があることはわかった。でもこういう聴取では苛立つても顔には出さな。」

それも刑事として相手へのマナーだ、相手は被害者遺族なのだから。野瀬の言葉に迫田は何時にもなく真剣に頷いた。また一口コーヒーを飲み、テーブルに置いた。

「迫田、お前は京都に戻れ。俺は明後日戻る。」

「ええ！僕一人で帰るんですか？」

「そうだ。主任にはもう話してある。俺の滞在許可も出た。向こうも人手が足りないらしい。俺の居ない間は主任と一緒に捜査してくれ。」

何か文句があるか？野瀬は手のひらをひらひらと動かした。

「ほら、早くいけ。」

「わかりましたよ……。」

帰りますよ、帰ればいいんですよ。迫田はそう言って席を立ち、

「コーヒー代はお願いしますよ。」

ニヤッと笑って喫茶店を出て行った。迫田が見えなくなると野瀬は腕を組んで考え込んだ。雪乃の表情、行動、言動を思い返す。今までに無いタイプの遺族だ。泣きもしない、叫びもしない、犯人という言葉さえ言わない。それに、

「知りたくもない……どういう意味だ？」

野瀬は首を振った。いくら考えても雪乃という人間が分からない。

店内には野瀬しか客はいなかった。時計を見ると針は夕方5時をさしている。そうか夕食時だな。野瀬はとりあえず部屋へ行こうと席を立ち、何気にカウンター席に目をやった。カウンターの向こう側で先ほど案内してくれた雪乃の友達だという前田美里がいるのが見えた。野瀬は美里の前のカウンター席に座りなおした。美里は野瀬に気づき、少し顔色を変えたがすぐにコーヒーのおかわりを勧めた。もらつよ、野瀬は答えた。コーヒーを出す美里に、ありがとう、と言い、美里に話しかけた。

「君は雪乃さんとは長い付き合いなのか？」

美里はカップを洗う手を止めずに答えた。

「20年になるかしら。」

「20年か。長いってもんじゃないな。」

「小学生の時、私が転校した学校で雪乃と出会ってからの付き合いだよ。就職先まで同じ東京で。」

「そうか。じゃあ、君は雪乃さんのことは良く知っているんだね。」

美里は洗物をする手を一瞬止めた。が、またすぐに動かしした。少し沈黙が続いた。静かな店内に流れる音楽が野瀬にはよく聞こえた。

「雪乃は……どうでしたか？」

音楽がかき消されてしまいそうな、そんな声で美里は言った。

野瀬は少し間をおき、コーヒーを一口飲んだ。

「正直、少し参ったよ。」

いや、少しどころじゃないな、カップを置き苦笑いをした。

「どうして？」

「彼女のことがよく分からないんだ。」

今度は煙草を手に取り火をつけた。その様子をチラッと見て、そうでしょうね、と美里は答えた。

「私でさえよく分からないのに・・・。」

そう言った美里を野瀬は見た。美里はため息をついて言葉を続けた。「私が雪乃と初めて会ったとき、彼女はすでにクラスでも孤立していたわ。孤立する人はそれなりに理由がある。性格が悪いとか暗いとか、ね。彼女の場合は、話しかければ答えるし、頭も運動神経も人並み以上だったからそういうところは周りから一目置かれていたわ。でもいつも控え目で決して自慢するようなことはなかった。これを聞けば孤立していたなんて思わないでしょ？」

美里は洗ったばかりのカップにコーヒーを注ぎ、それを持ってカウンターの外へ歩き野瀬の隣に座った。

「そうだな。」

野瀬は頷いた。

「孤立していたのは雪乃の心よ。雪乃と出会って1年以上、彼女の笑顔を見たことがなかった。それに気付いた時、彼女はいつも一人なんだと思ったの。」

美里はカップを両手で包み込むようにして持ち、一口飲んだ。野瀬は彼女の言葉を黙って聞いた。

「ある日ね、そんな彼女を見かねて・・・ううん、そんな彼女に苛立ったのね。私、あまり気持ちを抑えることができない性格だから。」

そう言って小さく笑った。

「今でもはつきり覚えてる。私が怒ってぶつける言葉を雪乃は黙って聞いていたわ。全部彼女に吐きだして息を切らした私の手を雪乃

が握った。少しして雪乃、泣き出したのよ。凄く泣いてた。そして泣き顔で私を見て、『ありがとう』って言って笑ったの。」

初めて見る雪乃の笑顔だった、美里は少し上を向きながら微笑んだ。照明に照らされた美里の姿を見て野瀬は彼女は正直な人間なんだと思った。そして雪乃のことを大好きなんだと感じた。

美里はカウンターの奥に視線を戻した。

「その時に決めたの。私は雪乃にこれからも正直でいようって。彼女は他人の心がきつと怖いよ。それを世の中の人は弱い人間だと言うでしょ？でも、雪乃は自分が生きる為に必死に心を守ってる。」

美里は残りのコーヒーを一気に飲み干す。

「私の自己満足なだけよ。」

そう言っただけで席から立ち上がった。美里の背中に向かって野瀬は言った。

「始めここに来た時に君が言った言葉の意味が何となくわかったよ。」

美里は振り向いて少し笑った。野瀬も少し笑い席を立った。

部屋に入り、持っていたバックを無造作に置くと野瀬はベッドに横になった。腕を頭の後ろで組み天井を見た。雪乃は長い年月そうやって何もかもを隠しながら生きてきたのだ。気を許せる相手はたった一人、美里だけ。これまでの人生がどんなに長く感じた事だろう。同じ年月を生きてきた自分さえ29年は長く感じてきたというのに。自分の親や兄弟にまで心を隠してきたのか。『知りたくもない』この台詞は雪乃が心を守りたいがゆえに言った言葉なのか。ベッドから起き上がり窓の外を見た。10階からの景色は東京ではあまりいい景色ではなかった。下をみると大勢の人が歩いている。

「ここから見える全員が、雪乃にとって苦痛の一部なんだ。」

俺もその一部。野瀬は携帯を開き、ゆっくりと目を閉じた。それでもいい。

「それでも・・・君のことをもう少し教えてくれないか？」

お願い

銀杏並木を抜けたところにその公園はあった。平日の昼間の時間帯なのか、そこまで人も多くはない。小さな子供連れの親子や老夫婦のほうが多い。遠くのほうには噴水も見えた。子供のはしゃぐ声がここまで聞こえてくる。

野瀬は腕時計を見て、そばにあったベンチに腰掛けた。5月という気候のせいか日差しも柔らかく、時折髪の毛を揺らす風も優しい。こんな日は眠たくなる。野瀬はゆっくり目を閉じた。

昨日の晩、雪乃と14時に会う約束をした。この場所を指定したのは雪乃だ。ホテルからさほど遠くないこの場所は東京に詳しくない野瀬にも来れた。

「野瀬さん？」

突然の声に野瀬はぱっと目を開けた。その視線の先に雪乃の姿が見えた。

「ああ、すまない。つい……。」

野瀬は髪の毛をくしゃっと掴んだ。

「お待たせしたみたいで……。」

「ごめんなさい、雪乃は頭を下げた。」

「いや、大丈夫だよ。」

まあ、座って。野瀬は雪乃をベンチに座るよう促した。雪乃はゆっくりとベンチに近づき、野瀬と少し距離を置いた位置に腰掛けた。少し間をおき、背中を丸め、うつむきかげんで野瀬が口を開いた。

「昨日はつらい思いをさせて悪かったね。」

「いいえ、妹として聴取を受けるのは当然です。」

「俺たちも仕事なもんでね。で、今日は……。」

野瀬がそう言いかけると、雪乃はスカートをぎゅっと掴み、唇を噛み締めた。

ちよっと待って……。野瀬は雪乃に顔を向けた。

「今日は事情聴取じゃないんだ。お姉さんのことは聞かないから安心してくれ。」

「えっ……。」

雪乃の顔が険しい顔から、キョトンとした表情に変わる。

「いや……その……あれだ。君と少し話をしようかと思ってね。」

「話？」

「ああ、日常の話さ。」

意味が分からないという表情で雪乃は野瀬を見た。

「例えばだ……。君から見た俺の印象は？」

「えっ？そんなこと急に言われても……。」

口元に手をやり雪乃は少し考えた。

「堅物。」

その答えに野瀬は声を出して笑った。

「堅物か……。なかなかいいところを突いてる。」

野瀬は空を見上げながら続けた。

「そのほかに、仕事人間、無感情、人に興味なし、女嫌い……まわりからはこう言われてる。」

「本当にそうなの？もし本当なら……。うっん、まず無表情は違うわね。」

「そうか？」

「ええ。無表情の人はそんなに簡単に笑ったりしないわ。」

雪乃は真剣な顔で言った。

「では、俺が見た君の印象を言おうか。綺麗、これは間違いない。気遣い屋。感情表現が下手。そして……寂しそう。」

指を折ってそういいながら野瀬は雪乃をチラッと見た。それに気づいた雪乃は、ぱっと目をそらした。

「……私寂しそうに見える？」

「ああ。」

いや……。違うな。首を横に振る。ポケットに手を入れ、野瀬は立ち上がり雪乃を見た。

「感情表現が下手というのは間違いのようだ。」

穏やかな表情で野瀬はじつと彼女を見続ける。

「この短時間で君の表情は少なくとも5回は変わったよ。」

雪乃は少し目を見開き、

「そんなに観察しないで……。」

そして、フツツと笑った。野瀬はまたベンチに座りなおした。

「やっと笑ったな……。」

小さく呟き、自然と顔が緩むのが分かった。これをなんの感情というのだろうか？

「実は昨日、君の友達から少し話を聞いたんだよ。」

「美里ね。」

「そう。彼女は本当に君が大好きなんだな。」

「私の唯一の親友よ。20年の付き合いなの。」

「そう言ってた。大好きだが、ものすごく心配もしている。それを自分の自己満足だといったよ。」

「そんなことないわ。だって美里は私の一番ほしかったものをくれたもの。」

雪乃は空を見上げた。私も美里が大好きだわ、でも……。見上げた瞳が少し潤んでいるのに野瀬は気づいた。が、気づかない振りをした。

「正直、初めて君と会った時、つまり昨日のことだが。やりにくいと思っただよ。君の口から何の情報も得られなかったしね。6年刑事をしているが、君のようなタイプは初めてだった。」

野瀬は一度言葉を切って、大きく息をした。

「でも、美里さんから話を聞き、その上で今日は君と話をした。俺が言えることは……。」

野瀬は雪乃と同じように空を見上げた。

「氷川雪乃という女性は、フキノトウのような女性だと思った。」

雪の中で一人、厳しい寒さに辛抱強くじつと耐え、暖かい太陽の光が冷たい雪を溶かしてくれるのを待っている。本当に雪乃のよう

だ。野瀬はじつと空を仰ぎ見た。

雪乃は風で乱れた髪を手で整え、手を見せて。と、野瀬に言った。

野瀬はポケットから右手を出し雪野に差し出した。雪乃はその手を自分の両手で軽く握った。目を閉じ、自分の手を握る雪乃を野瀬は呆然と見た。手を離して、

「……ありがとう。」

雪乃は寂しそうに笑いながら言った。

「お願いがあるの。」

ベンチから立ち上がり、ゆっくりと振り向いて泣きそうな大きな瞳でまっすぐ野瀬を見つめた。

「あなたに、私の秘密を共有してほしいんだけど、お願いできるかしら？」

共有？

公園で話をした後、雪乃は今から話す内容は絶対に他の人には聞かれない、と自分の自宅に行こうと促した。野瀬は少し躊躇した。いくら相手が被害者遺族だとしても一人暮らしの女性の部屋に足を踏み入れるのはやはりまずいのではないかと。

その様子を察してかどうかは分からないが、雪乃は笑った。

「迷ってる？」

「やはり、一人暮らしの女性の家に上がり込むというのは……。」
「そんなに焦らなくても。貴方もそんな表情をするのね。それとも何？」

雪乃は手を後ろに組んで体を左右に揺らしながら聞いた。

「野瀬さんも女性と2人つきりになると狼にでも変身するのかしら？」

雪乃は野瀬をからかうように口に手をあて笑った。野瀬はそんな雪乃を見て怪訝な顔をした。

「おい、よしてくれよ。冗談でも……。」

「怒らないで。分かってる。あなたはそんな人じゃないわ。」
そう言つて雪乃は、いきましょ。と、歩き出した。

野瀬は小さくため息をつき、仕方なく雪乃の後について歩いた。

夕方の公園は昼間とはまた違う風景に変わる。学校帰りの学生やカップル、帰宅途中の社会人が殆どだ。風も昼間より少し冷たい。公園までの銀杏並木を逆に歩く。野瀬は少しテンポを上げ、雪乃の横に並んで歩いた。チラッと横目で雪乃を見てすぐに視線をそらした。2日間で見えた雪乃の中で一番寂しそうな表情をしているのが野瀬には分かった。『秘密の共有』あの言葉に原因があることも何となく分かった。

「東京にもこんな場所があるんだな。」

おもむろに野瀬は口を開く。その言葉に少しビクツとし、そうね。

と答えた。

「野瀬さん、夕食は？」

「ああ、俺はいつも外食だから心配しなくていいよ。」

「私はいつも自宅で食べるの。」

「凄いな。一人暮らしの自炊は大変だろ？」

「料理は結構好きなのよ。今日は野瀬さんも家で食べていって。」

えっ？野瀬は雪乃を見た。

「何？」

「いや・・・家に入り込むだけでも・・・あれなのに、食事まで頂くのは・・・」

「私の手料理じゃ不服？」

「いや・・・そういう意味ではなくてだ・・・」

「大丈夫よ。体に害を与えるようなものは作らないから。」

「だから！そういう意味ではなくて・・・」

「じゃあ、どういう意味なの？」

雪乃は首をかしげた。野瀬は肩を落とし、

「あのねえ・・・刑事としてではなく知り合いの男として言うけど、手料理なんぞは女友達か大切な男に振舞うもんだよ。」

野瀬の言葉に彼女は目を閉じた。そして真剣な顔つきになり哀願するような瞳で野瀬を見上げた。

「分かってるわ・・・あなたは私の秘密を共有してもらおう大事な人。だからご馳走するの。」

夕方の5時を知らせる音楽が遠くで鳴り始めた。

雪乃の家は公園からそう遠くない場所にあった。セキュリティのかかったマンションの入り口を入るとエレベーターがあった。が、階段で3階まで上がった。共有廊下の一番奥の扉の鍵を雪乃開けた。入って。雪乃は野瀬を部屋に促し、鍵をかけた。1Kの部屋は一人で住むには十分な広さだ。

「そこに座って。」

雪乃はソファアを指差した。野瀬は雪乃の言うとおりのソファアに座り軽く部屋を見渡した。

「綺麗にしてるね。」

「そうかしら。物が余りないだけじゃない？」

確かに29歳の女性の部屋のしては少し素っ気無い感じた。野瀬はそう思ったが、

「いや、こんなもんだらう？」

そう言って、俺の部屋より100倍マシさ。と笑った。

「ご飯、急いで作るわ。」

雪乃は腕をまくり、ゆっくりしてて。とキッチンに向かった。

野瀬は正直落ち着かなかった。女性の部屋でしかも二人つきりになるのは29年間生きてきて初めてのことだった。仕事で一人暮らしの女性の部屋に行くことはあるが、いつも相棒の迫田と一緒にいる。プライベートでも女友達などいない。確かに高校生の頃は彼女がいたこともあったが、もちろんお互い実家の行き来であり、よってこの状況が野瀬には初体験だった。しかも母親や親戚の叔母以外の女性の手作りご飯など食べたことがない。

「煙草吸ってもいいかい？」

もちろんベランダで。野瀬は雪乃に声を掛けた。

「いいですよ。」

雪乃の返事を聞いて野瀬はベランダに出た。煙草をくわえ、火をつけた。一口目を大きく吸い込んでゆっくりと煙を吐く。煙草を持った手が少し震えている。

「情けない・・・。」

震える自分の手を憎らしそうに見ながら、その手を口元にもっていき。風はほとんどなく、夕方6時前だが空は夕日が終わりそうだった。そんな空をみながら野瀬は肩をすくめた。

「俺はなぜここに来てしまったんだ・・・。」

なぜ断れなかった？不覚だ。ああ・・・！野瀬は髪の毛を、というより頭をがりがり掻いた。

「そんなにかゆいの？」

突然後ろから声を掛けられ、野瀬は、わぁ！と思わず声を上げて振り返った。そんな野瀬を見て雪乃は目を丸くし、すぐに笑って、

「用意が出来たわ。」

食べましょ。と、戻っていく。野瀬は鼓動が早くなつた胸を叩き、大きく深呼吸をして部屋に入った。

野瀬と雪乃はテーブルを挟むように向き合って座り、雪乃が作った夕食を食べていた。炊き立ての白いご飯にお味噌汁、メインディッシュは煮込みハンバーグ。女性と全くといって良いほど付き合いない野瀬には少し居心地の悪い、けれど新鮮で一言では言い表せない気持ちだった。

「しかし、美味しいな。」

これは正直な感想だった。煮込みハンバーグは野瀬の好物だ。良かった、雪乃は嬉しそうに笑った。

「男の人ってやっぱりハンバーグとか好きなの？」

「そうだな。嫌いな男のほうが少ないと思うよ。」

「じゃあ、今日のセレクトは間違っていないかったのね。」

「大正解だ。本当に美味しいよ。」

そう言つて野瀬はお箸で大降りに切つたハンバーグを口に運んだ。

「俺も一人暮らして、仕事もこんなだから、コンビニ弁当や近くの食堂なんかで済ませることが多くてね。久しぶりだ、こんな夕食は。」

最後のひとかけらのハンバーグを口に入れ、ご馳走様。と野瀬は箸を置いた。

ご馳走様。と雪乃も手を合わせ、二人分の食器を台所へ運んだ。少しするとコーヒートの香りがして、今度は二人分のカップを持って雪乃が戻ってきた。

外は真っ暗になっていた。二人はさっきと同じように向き合い、黙つてコーヒートを飲んだ。野瀬は少し濃い目のコーヒートを飲んで、

落ち着く自分に少し安心した。そしてここに来た目的を切り出す。

「雪乃さん、君は一体何を……。」

「待って……。」

雪乃はもう一口コーヒーを飲み、テーブルに置いた。そのカップをじっと見つめた。

「野瀬さん、あなたの好きなものはカツ丼、お刺身、ラーメン、そして煮込みハンバーグ。」

その通りだ。野瀬は声に出さず答えた。

「9歳の夏、階段から落ちて右足を骨折。13歳の冬、風で肺炎をおこしてる。20歳の誕生日には、急性アルコール中毒で救急搬送された。」

「ちょ……っ！ちょっと待ってくれ……！」

そう言った野瀬の手を雪乃はゆっくりと握った。

「なんで、そんなこと知ってるのだった？」

そうだ。そう言おうとした。野瀬は少しの間何も考えることが出来なかった。少しずつ思考回路を元に戻し、下を向いたままの雪乃を見た。時計の針の音が不思議なくらい部屋中に鳴り響いているように聞こえる。雪乃は野瀬の手を離し、しばらくうつむいていた。沈黙の後、顔を上げた彼女が震えた声で言った。

「これが……私の秘密よ。」

共有？

『サイコメトリー』 - ESP超能力の一つ。人物や物に接触することにより、物体に残る人の残留思念や物体の記憶を読み取ることも可能である。

野瀬の頭の中はかなり混乱していた。混乱しながら昨日と今日の彼女についての言動を思い返し、整理してみる。『知りたくもない』この言葉が妙に引っ掛かったことや、美里が言った『他人の心が怖い』。サイコメトリーという言葉は聞いたことがある。それがどんな意味かももちろん知っている。しかし非現実的なオカルト用語だとは思っていなかった。

「驚いた・・・？」

雪乃は悲しげな瞳で一生懸命笑顔を作った。

「・・・ああ・・・！！。じゃあ、今日の煮込みハンバーグは・・・。」

そう言った野瀬に雪乃は無言で頷いた。そうか、あの時・・・。野瀬は公園で雪乃に手を握られたことを思い出した。

「8歳の時だった・・・。」

雪乃が静かに口を開く。

「本当に突然だった。何かに触れるとわけのわからない色んなものが頭の中に流れ込んできた。しかもそれだけじゃない・・・。人に触ると相手の心の声が耳の奥に響いてくる・・・。人に関わり触れてしまったら口では出さない色んな感情を知ることになる。苦しくて・・・苦しくて仕方がなかった。」

雪乃はぎゅっと唇をかみしめた。

「他人は関わらなければいい。でも、家族はそうもいかなかった。私の親は昔厳しくて、何かあると私たちを怒り、叩かれることもあったわ。その手が私に触れると親の感情が流れ込んでくる。私が悪いことをして怒るなら仕方ないと思った。けれど、大半は父と母の

夫婦仲の不満解消が原因だった。それが分かりながらじつと耐えてきたのよ！」

雪乃の目から涙がこぼれる。野瀬はじつと黙って雪乃の話を聞いた。「私だって人と普通に話したり、どこかに出かけたり、一緒に食事をしたり・・・好きな人だって・・・でも、怖くて怖くて仕方がないの。心の中で私のことを本当はどう思っているのか・・・触れてしまったらすべて分かってしまうんだもの。その人が今までどんな風に生きてきたのか分かってしまう・・・。そんなもの見たくもないし、知りたくもないわ！！」

雪乃は肩を震わせ声を殺して泣いた。

野瀬は何か胸の奥が熱くなるの感じた。ポケットから白いハンカチを取り出し、黙って雪乃の前に置く。ありがとう。雪乃は小さく言いそのハンカチを握りしめた。

「美里は、こんな私を初めて正直に怒ってくれた大切な友達。あの時の彼女の心に裏表がなくて・・・本当に嬉しかった。今でもそう、彼女の私に対する態度には裏表がない。」

でも、美里にも本当のことが言えなかった。雪乃はハンカチで涙を拭いた。

「でも、どうして俺にこんな話を？」

「ただ・・・嬉しかったの。」

それ以上雪乃は答えなかった。

野瀬は苦しくて仕方なかった。20年以上も彼女は一人でずっとこんな苦しみを抱えながら生きてきたのだ。相談したくてもできず、何もかもを一人で背負い込んで、すべてを我慢してきた。「悲しい人生」その一言ではきつと済まされないサイコメトラーとしての孤独。きつとこの力を持った人間にしか分からない。

野瀬の心は決まっていた。

「わかったよ。君の秘密の共有に協力しよう。」

ただし、条件が一つ。野瀬は人差し指を立てた。雪乃はその指と野瀬を交互に見る。

「今日からは、つらいことや苦しいことでどうしようもない時は秘密の共有者に何でも相談すること。秘密を共有するものとして俺にその権利はあると思うが?」

雪乃は、『違うか?』と言う野瀬に涙で一杯になった瞳を向けて

「いいの? 私のこと・・・嫌じゃない?」

「どうして?」

「だって・・・これから先、私はあなたの記憶や感情を読んでしまいかもしれないのよ?」

「別に・・・かまやしないさ。」

「嫌に決まってるわ。誰だって自分の過去や心の中を見られたいとは思わないはず。」

「そうだな。そんな人間がきつと大半だろう。でも、俺には別に見られて不都合な過去はないし、君に心を読まれても多分、君を傷つけるような感情は抱かないだろうよ。」

「・・・じゃあ、約束して。誰にも言わないって。そして・・・共有者として私に正直に接するって。」

「わかった。約束する。で、君は俺の条件を飲むかい?」

雪乃は精一杯の笑顔を作り、何度も大きく頷く。

「これで共有の契約は成立だ。」

野瀬も雪乃に向かって笑顔で笑った。

刑事としてはいいことではない。しかし、これは刑事としてではなく一人の人間としての決断だ。野瀬はそう自分に言い聞かせた。二人だけの秘密の共有・・・何故かとても特別なことのように、今まで体験したことのない胸の高鳴りを覚えた。

時計は21時を回っていた。そろそろ失礼するよ。野瀬は雪乃にそう言っ立ち上がった。

「煮込みハンバーグ、本当に美味しかった。ありがとう。」

帰り支度をし、玄関に向かう野瀬の背後から雪乃が呼びとめた。野瀬が振り返ると、何か吹っ切れたかのような凜とした表情で雪乃が立っていた。

「私、頑張ろうと思う。」

「何をだ？」

「逃げずに現実を見るの。」

「現実？」

雪乃は頷いた。

「野瀬さん、いつ京都へ帰るの？」

「明日帰る予定だが……。」

「じゃあ……。」

いつにもなくはっきりとした口調で雪乃は言った。

「明日、一緒に京都に帰るわ。……きっと私には犯人が見えるか

」。

協力要請

二人は高速道路の上にあった。平日なのか、行き交う車の数も多くはない。東京から京都までの道のりは時間のかかるドライブだった。雪乃の車を運転する野瀬は少し不機嫌そうな顔だった。助手席には雪乃が静かに窓の外を見ながら座っている。普通のドライブならこんな良い天気には窓を開けて気持ち良い風を車の中に誘い込むだろうが、二人ともそんな気持ちには当然なれず、重い空気が車中を包み込む。

野瀬が不機嫌な理由は一つだった。昨日彼女が言った言葉だ。『私には犯人が見える』だから一緒に京都に帰るのだと。確かに姉の遺留品を触れば雪乃には犯人が見えるに違いない。犯人は捕まり、事件は解決するのだ。刑事にとって、こんな仕事冥利に尽きる話はない。しかし野瀬にはそれが不満だった。

車の時計を見て、そろそろサービスエリアに入ろう。と野瀬は言い、雪乃を見た。雪乃は相変わらず外をじっと見ながら頷いた。出発して2時間程経っている。その間、二人の間には殆んど会話がなかった。

サービスエリアに入り車を止めると、時計はお昼の1時を回っていた。車を降りた雪乃は、

「何か食べるものは？」

野瀬に尋ねる。

「そうだな。お腹も空いたし。」

「じゃあ、買ってくるわ。何がいいかしら？」

「出来れば運転しながら食べられるものだと助かるよ。あとは君に任せる。」

雪乃は頷いて店内の方へ歩いていく。その後姿を見ながら、野瀬はため息をつき煙草をくわえた。この調子だとあと4時間程で京都に着く。そしてその後のことを考える。

「・・・また、彼女は傷つくのか。」

野瀬は煙を吐きながら呟く。昨日雪乃が京都へ帰ると言った時、野瀬は断固反対した。が、雪乃は引き下がらなかった。一緒にダメなら一人で京都に帰るとまで言い出した。

「秘密を共有するのも大変だ。こんなことをすれば傷つくと分かってるのに。でも、本人の意思を曲げられず、今ここにいるんだから。まったく・・・。」

事を成した後のことを想像し、野瀬はまた大きいため息をついた。

「とにかく・・・動き出したものは仕方ない。帰りながら考えよう。」

「

戻ってくる雪乃見えた。野瀬はエンジンをかけ、運転席に座った。

助手席のドアが開き紙袋を持った雪乃が乗り込んだ。

「この辺は牛しぐれが有名なんですって。」

そういつて紙袋からおにぎりや串焼き、ポテトフライなどを取り出した。

「あとは、お茶とコーヒー。」

雪乃は、これで全部よ。お茶の入ったペットボトルを野瀬に渡した。

「ありがとう。出発するよ。」

車はパーキングエリアを出て、また道路を走り出した。

静かな社内で会話もないまま食事を終え、また先ほどのように雪乃は窓の外をじっと見ている。野瀬もまた口を閉じたままひたすら運転をしていた。

「そんなに・・・心配？」

突然しゃべりだした雪乃に、野瀬ははつとした。そして前方のガラスにうつすらと映る雪乃を見た。食事を受け渡しする時に悟られたことはすぐに分かった。

「本当に・・・君には何も隠し事が出来ないな。」

まっすぐ前を向いたままそう言った野瀬を雪乃は少し笑って見た。

「心配以前に、俺は反対だよ。」

野瀬はまた少し不機嫌な顔で答えた。

「本来なら俺たち警察の仕事だからな。それを苦しむことが分かっていながら、こんなことに君の力を使わせるのはどうしても納得がいかないのさ、俺は。」

少し声が荒立っていることは野瀬も気づいていた。

「お姉さんだつてきつと、君の秘密を知っていたら、こんなこと望んだりしないだろうよ。」

「私・・・姉が大好きだった。」

「・・・。」

「友達も作らず、寂しそうにしている私を小さい頃から姉は心配してくれてた。そんな妹なんていたら普通は嫌でしょ？でも、姉は違つた。時間があればいつも私と一緒にいてくれたわ。」

私が一人じゃないようにつて。雪乃は懐かしい・・・というような瞳でまた窓の外を見た。

「私は姉の心情をずっと見てきたのよ。中学生の頃はなかなか成績が伸びず、悩んだ。高校生の時は恋人ができてワクワクしてたことや喧嘩して落ち込んだことも全部私には分かった。でも、姉は私の前では少しも顔に出さなかつた。」

雪乃は窓を少し開けた。窓から入る風が雪乃の前髪を揺らす。

「君にとっては本当にいいお姉さんだつたんだな。」

「いいつてもんじゃないわ。最高の姉よ。」

雪乃はぎゅつと手に力を入れた。野瀬はそれに気づいたが見ない振りをする。

「先に姉が就職して一人暮らしを始めた。私は実家でも一人ぼっちになってしまったと思った。それでも姉は時々帰ってきて、私のことをちゃんと見てくれた。私は就職する時に、このまま姉に迷惑を掛け続けるのが苦しくなつて、離れた場所であつて・・・。」

「それで東京なのか。」

「ええ・・・。」

野瀬は缶コーヒー開けて飲む。

「私は東京に来て、姉とも殆んど連絡を取らなかつた。時々姉から私が元気かどうかの確認メールがきたわ。」

「メールじゃ、相手の心は読めないんだろ？」

「うん。」

「ちゃんと返信してたのか？」

「返信はしたわ。でも東京に逃げた自分が恥ずかしかった。姉はあんなにも私のこと大事だと思ってくれていたのに。私はもう『ありがとう』も言えない……。」

雪乃の震えた声が野瀬の胸に響いた。横を追い越す車の中で笑っている男女の姿が見る。無意識にハンドルを持つ手に力が入った。

「もう、私に出来ることはこれしかない……。本当は早くこうしたかった。でも、怖かつたの。」

「怖いのは当然さ……。」

「もし私の力で犯人が分かつてそれを証言しても、きっと誰も信じたくない……。もっと私は傷つくわ。でも今は、秘密の共有者がいる……。しかも職業は刑事さん。」

雪乃はゆっくり野瀬を見た。

「私、勇気を出してちゃんと姉のことを見るわ。どんなことが見えても逃げたりしない。耐えてみせる。」

協力……。してくれるわね。と雪乃は目で訴えた。

「嫌だと言ったら？」

「野瀬さんは嫌なんて言わないわ。」

「なぜだ？」

「動き出したんだもの……。そうでしょ？」

「君って人は……！」

野瀬はがっくりと肩を落とした。その通りだ。動き出したものは仕方ない。さつきそう自分に言い聞かせたのだ。

「……わかつたよ。」

野瀬は呆れた声で小さく言った。

「ありがとう……。野瀬さん。」

雪乃も小さな声で言った。野瀬はそんな雪乃を横目で見た。野瀬の視線に気づかず、雪乃はまた窓の外を見た。見ながら雪乃は呟いた。

「野瀬さん……どうか私を嫌わないで……。」

真実の為の偽証

「先輩、おはようございます。」

あくびをしながらの迫田の出勤挨拶を聞くのは3日ぶりだった。ソファーに寝転んでいた野瀬はゆっくりと起き上がり背伸びをした。

「昨日は泊まりだったんですか？」

「ああ。」

「昨日京都から戻ってきたんですよ？それで泊まり??」

「ああ、もう、そうだよ。いいだろ！」

野瀬は髪の毛をクシヤリと掴んで洗面所へ向かう。水で顔を何度か洗い鏡を見た。昨日雪乃を実家へ送った後、家に帰っても眠れそうになかった。気づいたら足がここに向かっていた。一晩中色々と考えたが。

「どうしろっていうんだ・・・！」

鏡に映った自分に向かって威嚇する。ハンカチで顔を拭き自販機に向かった。定時時間までまだ時間がある。缶コーヒーを1本買い、屋上へ向かう。ベンチに腰掛け、煙草に火をつける。今日は曇らない晴天だ。

「やっぱりここだった。」

迫田が野瀬を見つけ、同じベンチに腰掛けた。

「先輩昨日、例の妹さんと一緒に帰ってきたんですか？」

「ああ。」

「道中、大変だったんじゃないんですか？」

「何がだ？」

「だって、あの人ですよ。」

迫田は東京の雪乃のことを思い返し、眉間にしわを寄せる。

「どうやって今日の事情聴取、説得したんですか？」

「説得？」

「先輩が説得したんでしょ？」

「違うよ。」

迫田は目をハテナにし野瀬を見た。

「彼女から一緒に帰ると言っただんだ。」

「えっ!?!」

迫田の目がハテナから一瞬で驚きに変わる。

「あの人が?」

「ああ。」

「信じられないですよ。あんなにも僕たちの質問に『知らない』の一点張りだった人がですよっ!」

「確かにそうだったな。」

「先輩・・・何かあつたんじゃないんですか?」

迫田がニヤツと笑って野瀬を肘で突いた。

「何かつて、なんだ?」

「何かつて・・・何かですよ。」

「言つとくが、お前が想像しているようなことは何一つないぞ。」

「僕が想像していることつて何ですか?」

楽しそうに会話のキャッチボールをする迫田に、やれやれ・・・。

野瀬は頭をふった。

「お前、主任と行動している何日間で性格余計に曲がったんじゃないか?」

「勘弁してくださいよ、先輩。こっちは大変だったんですから!」

「その言い方だと、俺は楽しんでいたように聞こえるが・・・。」

「そういう意味じゃないですよ。僕は、先輩とコンビが組めて幸せだつて言いたいんです。」

「俺は頭が痛いよ・・・。」

「主任についてる間、小言ばかりで耳が痛くなりましたよ。歳をとった刑事は皆、あんな風になるんでしょうかねえ。」

「さあな。」

「先輩はあんな風にならないでくださいよ。」

真剣にそんなことを言う迫田を見て、野瀬は笑いそうになった。

こらえながら野瀬は自分の過去を振り返った。本当は刑事ではなく弁護士になりたかった。学生時代は勉強もそこそこできた。ルックスも周りから見ればいい方だった。運動もできた。大学時代は法学部へ通い、初めて彼女もできた。しかし、見た目と中身のギャップが余りにも違ったのか、彼女はすぐに遊び好きの男へと心変わりした。大学4年の夏、男友達の一人が急に大学を中退した。父親が殺害され、家業を継がなければならなくなったからだ。男友達とは長い付き合いで、数少ない信頼できる友達だった。事件は未だに解決されていない。司法試験を受けたが、その父親と親友のことがどうしても頭から離れなかった。京都府警の試験も受け、同時に受かった。しかし弁護士ではなく刑事の道を選んだ。刑事になったところで友人の力になれるわけがない。しかし、友人のように一人の家族の死が残された者の人生を大きく変えるのだという事実。いい方に変われば良いが、事件で人生が良くなる家族などいないに等しい。

「先輩、そろそろ始りますよ。会議。」

迫田が腕時計を見ながらベンチから立ち上がる。現実引き戻され、野瀬はため息をついた。今から長い一日が始まる。そして、刑事としてタブーであろう事をしなくてはならない。

「これは、偽証罪に問われるか・・・?。」

煙草の火を消し、見えなくなった迫田の後を追うように中へ入って行った。

午前中は雪乃の姉の事件について捜査報告、今後の方針などの捜査会議だった。野瀬はそこで妹の雪乃についての東京での報告と午後からの事情聴取について捜査員へ報告をした。『どうやら、雪乃が何かを知っているようだ』と。仕事には人一倍真面目な野瀬の言葉を誰も疑う者はいなかった。

会議が終わり、野瀬は屋上へ足を運んだ。ベンチに勢いよく座り、ふうっと息を吐きだした。

「寿命がいくらあっても足りない・・・。」

顔には出さないが会議中、野瀬の心中は穏やかではなかった。

「真面目に仕事をしてると、たまには役に立つ……。」
「そう言つて独り苦笑いをする。」

「野瀬は屋上にありつてね。やっぱりここだ。」

「迫田がそう言つて野瀬の視界に入ってきた。うーん……と大きく背伸びをする。そしてくるつと野瀬の方を振り返る。」

「しかし……先輩。僕にはどうしても納得がいきません。」

「何がだ。」

「妹の雪乃さんのことです。」

野瀬の心臓が一回大きく鼓動した。

「何故だ？」

「考えてみて下さいよ。東京での彼女、何か知ってるように僕には思えませんでした。」

「迫田は腕を組んで手を顎にもつていく。」

「絶対……先輩と何かあったとしか……。」

「そう言いながらだんだんと顔がニヤけていく。」

「あのなあ……。」

「いや……。冗談ですよ。先輩がそんな男じゃないことは分かっています。」

「やっぱりそういう意味だったろう、さつきも。」

「えへへっ。と迫田は頭をポリポリかいた。」

「まあ、彼女も多分そんな軽い女性ではないでしょうし……。」

「そうか？」

「女性については多分、僕の方が先輩ですよ。」

「お前はそんなに経験豊富なのか？」

「まあ、先輩よりかはずっと豊富だと思いますけど？」

「俺と比べるなよ。」

「でも、豊富とか豊富じゃないとか関係なしにしても。彼女はかなりその辺はお堅い方でしょうね。」

「迫田の言葉を聞いて、なぜか野瀬の心に安堵感が生まれた。」

「聴取、14時からですよ。」

「ああ。」

「飯食いに行きましょう。僕もうお腹空きました。」

「一人で行って来い。俺はいい。」

「そうですね？じゃあ、行ってきます。」

「13時半までには戻ってこいよ。」

「了解です。」

迫田は足早に屋上から去って行った。正直、迫田の感の鋭さに驚いた。あいつも刑事らしくなった。と野瀬は空を見上げた。それと入れ替わりに主任の井出が屋上へ来た。野瀬の隣に座り煙草に火をつける。井出は4年前、野瀬が初めてコンビを組んだ先輩刑事だ。2年前に井出が主任となり、その時に新米刑事だった迫田とコンビを組むことになった。野瀬に新米の迫田をつけたのは井出だった。

「東京までご苦労だったな。」

「いえ。」

「迫田が言ってたぞ。話もろくに聞けなかったと。」

「確かにそうでした。」

「しかし、お前が手古摺るとは。例の妹さんってのはそんなに手強いのか？」

「普通ですよ。特別手強い訳ではありません。ただ少し・・・頑固者です。」

野瀬は笑いながら言った。

「ただの頑固者ならお前が手古摺ったりはしないだろ？」

「そんなことはありませんよ。私にだって得手不手ありますから。」

「じゃあ、彼女は『不手』の方が。」

「そういうことに・・・なりますかね。」

野瀬は煙は吐いて答えた。決して『不手』ではない。同時にそう思った。

「いずれにせよ。話す気になってお前と戻ってきたんだ。今日の聴取は頼んだぞ。」

「大丈夫です。」

そして二人は少しの間、コーヒーブレイクという名の沈黙に浸った。野瀬は井出のことは嫌いではない。刑事になりたての頃、井出に刑事のノウハウを一から教えてもらった。迫田がああ言うのはきつと自分に井出のような新米刑事の教育係に不向きだからなのだろう。

「そっぴゃあ、迫田の奴、お前のことをひどく尊敬してるな。」
井出はニヤついた表情で言った。

「そうですか？」

「ああ、俺と行動したこの何日間、時間があればお前の話ばかりしている。」

恋人でもあるまいし……。野瀬は眉間にしわを寄せた。

「まあ、だから俺はお前に迫田をつけたんだがな。」

「どういう意味ですか？」

「お前は仕事意識が高い。事件に大きい小さいなど一切言わない。そして人を観察する力は人一倍大きい。迫田にはお前のいいところを盗んで成長してほしかった。あいつはああ見えても、人一倍感が鋭いからな。」

さすがだな……。野瀬はゆっくりと井出を見た。

「野瀬、お前本当は弁護士になりたかったんだろ？」

「。。。。。」

「俺はな、部下に一生刑事をやれなど言うつもりはない。」

「。。。。主任。」

「お前がいなくなる前に迫田には野瀬流をちゃんと叩き込んでおきたかったのさ。お前はいい刑事だよ。手放すのは惜しいがな。」

そう言つて井出は立ち上がった。野瀬はそんな井出を目で追つ。

「やりたいことをやれ。どんな職業でもお前は大丈夫さ。」

そう言つて手をヒラヒラさせ、井出は屋上から出て行った。まさか主任にそんなことを言われるとは思っていなかった。野瀬は苦しくて仕方なかった。

「今から俺がやることは、主任の期待に背くことになるのか。。。」

？」

ネクタイをグッと握り締める。下を向き目を閉じた。暗闇の中で雪乃の姿が見える。寂しそうな顔、泣きそうな瞳、食いしぼる唇、頬を伝う涙・・・そして嬉しそうな笑顔。色んな雪乃が脳裏に浮かぶ。ゆっくりと目を開きまっすぐに青い空を見つめた。

「真実の為の偽証は彼女の為だけじゃない。・・・俺のためだ。」

代償

部屋にはソワソワした男が一人、腕を組んでじつと目を閉じた男が一人。机で資料をじつと見つめる男が一人。時計はあと10分で14時になるうとしてしている。

野瀬はここ『京都府警本部刑事部捜査一課 特別捜査第三係』に属している。通称『井出班』。だいたい10人前後の『井出班』は野瀬と迫田、主任の井出以外、捜査に出ている。

「まだですかねえ・・・。」

言わずと知れずソワソワした迫田が時計を見ながらぼやく。

「迫田、落ち着けよ。」

これもまた言わずと知れず腕を組みじつと目を閉じた野瀬が迫田にぼやく。

「なかなか、犯人像が浮かばんなあ。」

机で資料をじつと見ながら井出がぼやく。

3人同時にハア〜と息をつく。突然内線電話が鳴り響く。井出が受話器を取った。電話が終わり受話器を置いた井出が野瀬に叫ぶ。

「1Fからだ。彼女が着いたそうだ。」

「分かりました。連れてきます。迫田！」

準備しとけ。野瀬は迫田に部屋を指差しながら言った。

「分かりました！」

「迫田！」

コーヒー4本、彼女の分もだ。井出が迫田に叫んだ。

「分かりました！」

迫田は自販機へ走っていった。

野瀬はエレベーターに乗り込み1Fのボタンを押した。ドアが閉まり動き出す。この扉が開けば雪乃がいる。そして・・・。

「一芝居の始まりか・・・。」

扉が開き野瀬は1Fを見渡した。入口近くの椅子にうつむき加減で座っている雪乃が見える。髪を一つにくくり、七分丈の黒いジャケットにジーパン姿。ジャケットが黒いせいか顔色が今まで以上に白く見えた。野瀬はゆっくりと雪乃に近付きながら腕時計をみた。ちょうど針は14時をさしている。気配を感じたのか雪乃もゆっくりと顔を上げた。

「ジャスト、14時だ。」

そう言った野瀬に雪乃は小さく微笑んだ。野瀬は雪乃の横に腰かけた。

「大丈夫かい・・・？」

「ええ・・・。」

「本当に？」

「大丈夫よ。野瀬さん、あなたには迷惑をかけて本当にごめんなさい。」

「いいんだ、俺のことは。それよりも今からの君のことだよ。」

野瀬は小さく息をついた。

「この期に及んで、俺は君をできれば今すぐにでも帰してやりたい。」

雪乃はそう言う野瀬に今まで見せたことのない柔らかで優しい眼差しを向けた。

「野瀬さん、私の誕生日知っていますか？」

「えっ。ああ、12月24日だったかな、確か。」

雪乃の眼差しに見とれていた野瀬は、いきなり誕生日を聞かれ戸惑い気味に答える。

「私ね、正直親のこと憎んだこともあったわ。憎いというよりも許せなかったのね。でも、昨日実家に帰って落ち込んだ両親を見て、ふと思いついたの。私にとって、たった一つ、親から貰った大切な感情があったことを・・・。私が生まれた日、両親は純粹に私の誕生を喜んでくれた。『神様からのクリスマスプレゼント』だって。

私は望まれて生まれてきたんだって気がついた。でも今までの私は、

なんで私だけがこんな能力を持つてしまったのか、なんで私だけが……って生きていることが苦しいとばかり思ってた。死んだ方がマシだって思ったこともあったわ。でも、今は違う。やっぱり野瀬さん、あなたと出会ってしまったから……。私が望んで。」

「やっぱり……?」

雪乃は椅子に置いたバッグを手に取った。

「……私、きちんと向き合っわ。姉とあなたの為に。」

そして一瞬笑った。

「野瀬さん、決して自分を責めることはしないでくださいな。これは私自身が決めたことだから。」

雪乃は立ち上がり、お願いします。と野瀬に頭を下げた。頭を上げた雪乃の顔はキリッと引き締まり、なぜか野瀬にはこの何日間で見ただけの中で一番綺麗に見えた。彼女の言葉の意味を聞いたかった。が、それ以上何も言えなかった。

雪乃の事情聴取が始まった。雪乃は井出に姉の遺品を見せて欲しいと頼んだ。井出が持ってきた姉のブレスレットを雪乃はしばらく見つめていた。野瀬は彼女の前に座り黙ってその様子を見ている。井出と迫田も野瀬の後ろに座り、じつと黙っている。雪乃の手が動きブレスレットに手を触れた。そして目を閉じ、右の掌でゆっくりと握り締める。野瀬も膝の上で拳を握り締めた。不意に雪乃の体が震え始める。雪乃は震える右手を震える左手でギュッと握り、ゆっくりと目を開けた。蒼白の雪乃の顔が何を物語っているのか、野瀬は込み上げる何かをこらえながら、口を開いた。

「話して……くれるかい?」

雪乃はゆっくりと頷いた。そして口を開く。真実を伝える為の作り話を。

雪乃の証言がリアルタイムで井出から他の刑事へと伝えられた。野瀬は拳を握り続ける。涙一つ流さず話をする雪乃から聴取中一度も目を離さなかった。これが今、俺が彼女に出来ることだ。秘密を

共有する者として。そして・・・共犯者として。

次の日、犯人が捕まった。雪乃の話が逮捕への大きな証言となった。雪乃の姉は犯人ともみ合いの最中、携帯の動画を起動していた。野瀬もその携帯を確認した。捜索願いが出される2日前に雪乃からの何回もの着信履歴。そして、そこにははつきりと、姉が殺害されるまでの一連が写っていた。犯人の聴取を野瀬は他の刑事へ頼む。分かっていった。自分が聴取をすればきつと相手に何をするか分からない状態であることを。

野瀬は屋上へと足早で駆けあがった。ベンチを思いつきり蹴りつけ、息を切らす。この怒りをどうして良いのか分からない。あの携帯で見た犯行の一連を雪乃はプレスレットを透し見たのだ。なんとこの残酷なことを自分は雪乃にさせてしまったのか。

「畜生！」

野瀬は震える小さな声で呟く。聴取が終わった後、一度も自分に振り返らず帰っていく雪乃の後姿が脳裏から離れない。彼女は今頃どうしているだろうか。怒りと共に胸の苦しみが野瀬を襲う。

「何が秘密の共有者だ・・・。結局、一番共有するべきものが共有できないじゃないか。」

やはり、もう一度雪乃に会うべきだ。野瀬はポケットから携帯を取り出し、雪乃の携帯へ電話をかけた。

留守番電話のメッセージが耳に入ってくる。

「くそつ。なんでつながらない・・・！」

色んな感情が交差する。突然、屋上のドアが開き、井出が野瀬の名前を呼びながら走ってくる。

「例の妹さんが、目を覚まさないらしい・・・。」

手紙

野瀬は勢いよく病室のドアを開いた。

井出から雪乃が目覚まらず、病院へ搬送されたことを聞き、病院へ行かせてほしいと井出に頼んだ。井出は何も言わず、首だけを縦に振った。それを確認した野瀬は急いでここに来たのだ。

薄暗い素っ気ない病室にはベッドに横たわる女性と、椅子に腰掛け、そばに寄り添う男性。白髪混じりの体格のいい男性はおそらく雪乃の父親だと分かった。何度か会った事があるのを思い出す。野瀬は静かに病室の中へ足を踏み入れた。恐る恐るベッドへ目を向ける。

「雪乃さん……。」

ベッドに横たわり静かな吐息で眠っている女性を、間違いなく雪乃だと確認した。

「この子たちがいったい何をした！」

低いはっきりとした声が病室に響いた。

「娘たちがどうしてこんな目に会わなきゃいけない……。」

「氷川さん……。」

野瀬はそれ以上何も言えなかった。同じ事を何度も胸の中で叫びながら自分もここまで来たのだ。

長い沈黙が続く。看護婦が足早に行きかう足音が遠くから近くから聞こえる。

「昨日、雪乃が笑ったんだ。姉の写真の前で……。何十年ぶりだった。この子の笑った顔を見たのは。当たり前だ。私たちが嫌い、家を出てから殆ど実家には寄り付かなかったんだからな。ただ、家族の中で雪乃が心を許せるのは唯一、死んだ姉だけだった。辛かったらどう……。」

震えた声で父親は言った。そして、ゆっくりと振り帰った。疲れた顔が野瀬の胸を突き刺した。

「君は・・・？」

「・・・京都府警の野瀬です。」

「君が・・・野瀬くんか？」

「あ、・・・はい。」

父親はバツクから白い封筒を取り出す。

「雪乃のかばんの中にあつた。君宛の手紙だ。」

野瀬は封筒をじっと見つめ、動けなかった。父親は椅子から立ち上がり、野瀬に近寄った。手紙を野瀬の手に握らせ、私は医者と話をしてくる。そういつて静かに病室から出て行った。

野瀬は体の力を抜き、大きく深呼吸をして、雪乃にゆっくりと近づいた。椅子に腰掛け、雪乃を見た。綺麗な寝顔だ。苦しい表情などどこにもない。穏やかで柔らかな寝顔。

しばらく雪乃を見た後、『京都府警 野瀬様』と書かれ、しっかりと封をされた封筒をゆっくりと破り、2枚の便箋を取り出し綺麗な字で書かれた文章に静かに目を走らせた。

『野瀬様

あなたがこの手紙を読む頃には私はきつと夢の中でしょう。でも、こうなることは分かっています。

姉の身に何かが起こること。東京にあなたが来ること。

そして、あなたが秘密の共有者になることも。

野瀬さんには最後まで話さなかった。ううん、話せなかった。

私のもう一つの秘密。

時々だけ、夢の中で近い将来が見えること。

姉の身に何かが起こる夢をみて、何度も姉に電話をした。けれど、結局助けられなかった。

こんな力があっても、結局大事な人さえ救えない。

そのことがどうしようもなく苦しくて、情けなくて、東京では「何も知らない」と失礼な態度を取ったこと、どうか許してください。

夢の中で初めて、あなたと出会いました。

その日、目を覚まして思ったの。

現実には私の秘密を共有できる人なんていないわけがないって。

あなたが東京に来た日、私は本当に怖かった。

夢の中で見たあなたと現実に会うこと、

姉のことを聞かれること、

怖くて、苦しくて逃げたくなった。

でも公園であなたと話をして、あなたの過去や心を悟った。

覚えてますか？

あなたが私のことを「ふきのとうみたいだ」って言ったこと。

それを聞いたとき始めは、一人ぼっちで寂しい、

そんな意味なのかと思ったわ。。

けど、あなたの手を握ったとき、

あなたが言った意味はそうじゃないとわかった。

嬉しかった・・・。

その時に私は決心したの。

この力が私に与える、苦しみや悲しみの試練。

それが私の人生なら、逆らえない部分は受け止めよう。

でも、逆らせる未来があるなら逆らってみようって。

そんな気持ちになれたのも、

氷川雪乃という人間の闇の部分を、

理解し共有してくれた人が、本当にいたから。

私のせいで、あなたに多大な迷惑をかけてしまったこと、

職業倫理に背く行為をさせてしまったこと、

苦しい思いをさせてしまったこと、悩ませてしまったこと、

こんな形で、私のもう一つの秘密を打ち明けてしまうこと。
本当にごめんなさい。

最後に、私があなたに出来ることはこれくらいしかありません。
きつとあなたのこれからの人生が見えてくるはずです。

この手紙を読んでどうか苦しいとは思わないでください。
こうなることは分かって、選んだ道。

私は少しも後悔などしていませんから。

そして心から、あなたとの出会いに感謝しています。

野瀬さん、本当にありがとう……。」

1枚目を読み2枚目の便箋を見た野瀬は目を見開き、雪乃を見た。
何てことだ！

封筒と便箋を膝の上に置き、ベッドの中から雪乃の手を静かに出し、
両手で軽く握り締め、その手を額をあて強く握りしめた。雪乃と出
会ってから押えていた感情が一気に込み上げてくる。そして、野瀬
は声を殺して泣いた。俺の為なんか……。野瀬は聞き取れない
くらいの震えた声で眠っている雪乃に語りかけた。

「君はあの日……。2つの殺人をこの手で視たのか……。馬鹿野
郎！」

決意

夕方から雨が降り出した。周りの景色が一瞬で、色とりどりの傘模様となる。

病院から署へ戻る車の中、野瀬の頭の中は雪乃のことと、手紙のことで一杯だった。信号が青に変わったことにも気づかないくらいに。後ろの車がクラクションを鳴らす。その音でやっと青信号に気づき、軽く後ろに手を上げ、アクセルを踏んだ。

帰り際、雪乃の父親が言った。

『雪乃は・・・君には心を許していたんだな・・・』
自分宛の手紙のことでそう思ったのだらう。寂しそうな、嬉しそうな、そんな表情だった。

署に戻ると井出だけがデスクに座っていた。

「彼女の様子はどうだったか？」

野瀬をみるとすぐに声をかけた。野瀬は軽く頭を振った。

「原因がわからないそうです。」

「そうか。よほど、お姉さんの事が辛かったのかも知れんな。」

「・・・はい。」

「奴のほうは、あいつらが全部吐かせたよ。認めた。」

「そうですか。すみませんでした。」

いや、謝ることはない。と、井出は席を立った。

「今日はお前も帰れ。東京から戻って殆んど休んでないだらう。まあ、帰ってもお前のことだ。彼女のことを気になって眠れんだらうがな・・・。」

それと、明日は休め。今日は俺が宿直だ。と、大きく背伸びをする。やはり、この人にはかなわない。野瀬は少し笑った。

「じゃあ、俺は帰ります。」

お疲れ様でした。そう言うと野瀬は他の宿直の刑事にも声をかけ、

いま来た廊下を引き返した。静かな廊下は野瀬の靴の音だけが響いていた。

ドアを開けると真つ暗闇だ。部屋の電気をつける。京都府警の独身寮。何日ぶりに見る自分の部屋だ。コンビニで買ってきた缶ビールを開け、一気に喉に流し込んだ。空っぽの缶をテーブルに置き、スーツの内ポケットから封筒を取り出す。雪乃からの手紙。封筒をテーブルに置き、野瀬は布団の上に転がった。古い天井の染みをじっと見つめる。ふと雪乃の部屋を思い出す。

「全く……。大違いだ。」

東京に行つてから今日までのことが無造作に頭の中をよぎる。いつもなら事件のことや犯人のことを考える頭も今回は無意識に一人の女性に絞られた。勢いよく体を起こし、テーブルの上の封筒を手にとった。便箋を広げ、2枚目の紙をじっと見つめる。

「雪乃はどうやってこれを……。」「
携帯を手に取り電話をかけた。

「青木、久しぶり。」

青木……。7年前、野瀬が刑事の道に進むきっかけとなった友達。《……野瀬？久しぶりだな。》

電話の向こうのから懐かしい声が聞こえる。

「元気にしてたか？番号、変わってなかったんだな。」

《お前こそ。こっちは毎日客商売で忙しくやってるよ。お前は？確か刑事になつたつて噂で聞いたけど……。？》

「ああ。俺も頑張つて働いてるさ。」
《そうか……。あれから7年経つんだもんな。でも、突然どうしたんだ？》

「ちよつと聞きたいことがあつてな……。昨日なんだが、女性がお前のところに来なかつたか？」

《女性？おい、俺は客商売してるんだぞ。女性なら一日に何人もくるさ。》

「そうだな。すまん。」

《でも、一人、変な女がいたな。うちの看板の前にじっと立ってた女がいたよ。多分俺たちと余り歳は変わらない位の。丁度、出前が入って店を出たときに見たんだが。出前から帰ってきた時も、まだ立ってたっけ。》

雪乃だ。野瀬は思った。

「その女性、何か変わったことはなかったか？何か話したとか……」

《いや、俺は直接話はしてないが、余りにも顔色が悪くてお袋が店の中に連れて行ったよ。水を1杯飲んで帰ったみたいだけど……》

「そうか。ありがとう。」

《あの女、お前の知り合いか？》

「ああ。店の名前を聞いて、お前の店かと思っただけ。」

《かなりの美人だったけど……彼女かあ？》

「違うよ。」

《そっか。でももう、あの女のことはいい加減忘れろよ。世の中、あんな女ばかりじゃないんだからさっ。あつ、注文入ったから切るわ。今度ゆっくり飲もうや。》

「ああ。悪かったな、急に。頑張れよ。じゃあ……。」

携帯を切り、野瀬はうな垂れ、息を吐いた。

「やはり雪乃は、青木の店に行ったんだな。」

そして、看板から親父のことを悟ったのだ。7年前の事件のことを。この紙に書かれている内容は、事件の手がかり。犯人のことははっきりとは書かれていないが、犯人を捕まえる為の明確なヒント。おそらく野瀬のことを考えての、彼女の気遣い。

「そうだよ、青木。お前の言うように、世の中にはこんな女もいるんだ……。」

もう1本、缶ビールを開け、今度は一口飲んだ。ビールを握り締めたまま目を閉じ、野瀬はじっと何かを考えた。しばらくフリーズし

たように動かなかった。どれくらい時間が経ったか野瀬本人も分からない。目を開け、残りのビールを一気に飲み干す。

「……よし！」

それだけ言っていると布団に横たわり、また目を閉じた。

次の日、野瀬はまた、雪乃の病室にいた。病室に着いたときには眠った雪乃以外、誰もいなかった。昨日と同じようにベッドの横に座り、しばらく雪乃を静かに見つめた。その後で雪乃に語りかける。「ちゃんと分かってる……。君が俺に言いたいことは。」

だから……。野瀬は椅子から立ち上がった。「行ってくるよ。心配ない。共有者として、ちゃんと決着をつけてくるさ。」

君が安心して目を覚ませるように……。心の中で雪乃と約束をし病室を出た。

「野瀬、今日は休めと言っただろう。」

宿直上がりの井出が重い足取りで屋上にいる野瀬に声をかけた。

「すみません。疲れているのに呼び出したりして。」

そして二人で缶コーヒを片手に煙草を吹かす。

「この組み合わせは刑事になって癖になってしまったな。」

「一番悪い組み合わせですがね。俺も癖になってしまいました。多分、主任の影響です。」

「おいおい、俺のせいにするなよ。」

そんなたわいもない話をし、井出は言った。

「で、話は何だ……？」

野瀬はポケットから一枚の紙と封筒を出した。まず、紙を井出に黙って渡す。井出も黙ってその紙を見る。

「私がどうして刑事になったのか……。理由はその事件です。」

「この事件とお前と、何の関係があるんだ？」

「その事件の被害者は、私の親友だった奴の父親です。」

「そうか……。」

「主任には黙っていて申し訳ないと思っっています。自分の管轄外の事件であることも。分かっています。長年自分なりにその事件を調べました。犯人はまだわかりませんが、それだけの情報は掴みました。」

そう言っつて野瀬は、封筒を井出に渡した。

「その事件の解決が、私の刑事としてのけじめの時です。」

「そうだったか……。弁護士になりたいお前が何故、刑事をやっているのか。疑問には思っていたが。」

「これ以上は、私が動くことはできません。主任……。後は宜しく願います。」

野瀬はベンチから立ち、頭を深く下げた。

「言ったる。俺は部下に一生刑事をやれとは言わない。後は任せろ。1カ月内で片をつけてやる。これだけの情報があればすぐだ。」
1ヶ月だ、間に合うだろ？井出はベンチから立ち上がり、野瀬の肩を1度叩く。

「しかし、よくまあ、こんだけのものを一人で調べたもんだ。やっぱり、お前を手放すのは惜しいな。」

顔を上げた野瀬の肩をもう一度叩き、冗談だ。そう言っつて紙と封筒を内ポケットのしまい、井出は階段に向かい歩いていく。

「主任……。すいません。俺が調べたんじゃないんだ……。」

野瀬は井出の背中に向かつて、小さく呟く。けれど、これも雪乃の為。雪乃との約束。雪乃の望み。

野瀬は見えなくなった井出にもう一度深く頭を下げた。

「宜しく願います……。主任……。いえ、井出先輩。」

無意識の記憶

俺は資料に目を通し息をつく。光のあまり届かない小汚い部屋を見渡し、いつの間にか誰もいなくなっていることに気づいた。

刑事を辞めて2カ月が経つ。学生時代、大学で授業を教わった教授に弁護士について相談した。教授は自分の事務所に来ないか、と俺をここへ拾ってくれた。毎日、たくさんの資料に目を通し、人に会い、書類を書く。けれど慣れないながらも弁護士という業務をこなしている。刑事時代に味わえなかった肩凝りという迷惑な錘が日常的に俺に付きまとう。

「なかなか人使いの荒い教授だ。」

背伸びをして帰り支度をする。ドアが開いて教授が顔を出した。

「お疲れ様。悪いねえ。いつも。」

「聞こえましたか。」

「何がだい？」

「いえ……。大丈夫ですよ。」

「何かと私も忙しくてね。君に来てもらって本当に助かってるよ。相談者からの評判もいいし。」

「ありがとうございます。」

「私も今日は終わりなんだが、どうかね？一杯。」

「すみません。これからちよっと寄る所があるので……。」

「ああ、例の彼女の病院だね。」

「……はい。」

「じゃあ、また今度にしよう。お疲れ様。」

教授は机の上の資料をかばんに入れて、お先。とドアの向こうに消えた。

「また今度つて。今度はいつ教授と会えるんだ……？」

多忙な教授はなかなか事務所には戻ってこない。事務員も毎日電話に向かってイライラしている。それくらいこの弁護士事務所は多忙

なのだ。

「おっと、面会時間が終わっちゃまう。」
少し慌てて事務所を出た。

夕方6時過ぎの病院は日中と比べ面会者層がガラリと変わる。ほとんどもがスーツ姿や作業着姿のいわゆる仕事帰りの中高年が目立つ。病院内は病院独特の匂いの中に食事である匂い香りが混ざる。最近顔馴染みの仲間入りをしたのか、看護師が俺の顔を見ると挨拶をしてくるようになった。

517号室のドアをノックすると中から、どうぞ。と、声がする。それを聞いてからドアを開ける。

「今日の調子はどうだい？」

「来る度に同じ事をいうのね。今日も同じ答えだわ。『良くも悪くもない』わ。」

「そうか。」
俺と雪乃は同時に笑った。そしてベッドの横のいつもの指定席に座る。

「ご飯は食べたか？」

「ええ、もう病院の食事にも慣れたわ。きちんと全部食べたわ。」

「食欲はもう大丈夫だな。」

目を覚ました時の少し痩せた頬は、以前の雪乃に戻っている。病室の窓際にはひまわりの花が飾ってある。誰かが来たんだろう。気になったが、あえて聞かないことにした。

「私ね、最近あなたが来る日が何となく分かるのよ。」

「今日来ることも？」

「ええ。夢を・・・見るの。」

嬉しそうに話す雪乃とは反対に、俺は不安に駆られる。

「どんな、夢？」

「そうねえ・・・。」

雪乃は少し視線を上に向けた。

「2日前に見た夢は、あなたが仕事場で飲みに誘われていて、それを断って来てくれたわ。」

「飲みに……。」

俺は心臓の音が雪乃に聞こえないように手でスーツの裾を握り、前に深く隠した。

雪乃が記憶を無くして1カ月経つ。俺は恐る恐る口を開く。

「他に何か変わったことは？何でもいいんだ。」

そう言うと、雪乃の表情が急に曇った。

「何故かしら……。人に触れられるのがとっても嫌なの。お医者さんにも看護師さんにも……。とにかく嫌なの。」

「どんな風に？」

「わからない。わからないけど……。触れられそうになると頭の中が混乱しちゃう……。」

俺の胸の鼓動はさらに大きく加速する。何かが彼女の中で起こっている。

「……少し待っていてくれるかい？」

俺は立ち上がり急いで看護師のもとに走った。

「すみません。517号室の氷川さんのことで聞きたいことがあるんですが。」

病室で時々見かける看護師を見つけ声をかける。

「何ですか？」

「彼女、最近変わったことありませんか？」

「変わったこと？ああ、彼女ね。最近よく情緒不安定になるわね。」

検査の時なんか、彼女の体に触ろうとすると急に暴れだすのよ。検査が出来ないからって、ここ何日間は安定剤を投与してからじゃないと無理ね。普段は素直でいい子なんだけど。記憶喪失と何か関係してると思うんだけどね。」

看護師はそういって足早に別の病室へ入っていった。

「無意識のうちに彼女の力が……。戻ってきてるのか？」

俺は呆然とその場に立ち尽くした。人に触れるのを恐れている。そ

れは・・・俺と出会う前の彼女だ。しかし、俺が来ることを夢で見た彼女は全くそのことを恐れていない。それは、俺と出会った後の彼女。力に対しての感情までも無意識に、さらに混乱している。

「この先、雪乃はどうなるんだ・・・！」

雪乃の病室へ一歩近づく度に、俺の心の中の不安はどんどん膨れ上がる。ドアの前に着き、俺は大きく深呼吸をする。とにかく雪乃の前で不安な顔をしてはいけない。両手で頬を軽く2回叩き、ドアを開けた。

「野瀬さん、どうかしたの？」

雪乃は俺の顔を不思議そうにみた。俺は首を振った。

「何でもない。」

「そう。急に出て行っただから。」

「ちよっとお腹の調子が悪くなってるな。」

「そう・・・大丈夫？」

「ああ、治まったよ。」

そうそう・・・。雪乃は急に思い出したかのようにベッド脇の引き出しから細長い箱を取り出した。

「これ、野瀬さんに・・・。いつも私のことを気にかけてあげりがとう。」

受け取って。そう言って箱を俺に差し出す。

「何だい？」

「開けてみて・・・。」

俺は言われた通り箱を開けた。青い綺麗なボールペンが箱の中で光った。

「俺に？」

雪乃は少し照れたように、はにかんで頷いた。

「仕事でよく使うでしょ？ボールペン。」

「仕事？ああ、確かに使うけど・・・。」

そう言った俺は不思議なことに気がついた。今日一番、心臓が大きく動き出す。

「君に俺は仕事の話をしたことがあったかい・・・？」
雪乃は、何を言うの？と、笑顔で言った。

「弁護士さんなんですよ？野瀬さん。前は刑事さんよね？」

確信

辺りは薄暗い。家へ続く道は街灯の光が次第に灯火をあげ始める、少し残った夕日の光と一緒にしつかりと足元を照らしている。夏も近いせいか、街灯に群がる虫が日に日に数を増していた。

雪乃が目を覚ましてから俺は、週2回のペースで面会へ行く。行かない日は時々彼女からメールが届く。今日は一日暇だったとか、誰が見舞いに来たとか、そんな内容のメールだが、雪乃にとってはきつと気晴らしになっているに違いなかった。誰が来ても彼女には以前と同じように不安要素なのだ。前と違うのは、今の彼女は記憶をなくし、相手のことが分からないという不安。

俺は一度も彼女に自分の身の上話をしたことはない。彼女の記憶の中に俺の記憶もない今、余計なことは話すまい。そう思ったのだ。もう、苦しむ姿は見たくない。雪乃の為と言いながら、本当は自身のため。自分が辛い思いをしない為。

「俺は一体何がしたいんだか……。」
しかし……。彼女に何かが起こってるのは確かだろう。

「来週からは週4回に増やすか……。」
いつの間にか夕日は視界から消え、街灯のみがはるか先の道まで照らしていた。

「やあ、お疲れさん。」

黒いバッグとコンビニの袋を持った教授がにこやかに戻ってきた。

「教授、お疲れ様です。」

少し不機嫌そうに事務員の牧野が椅子から立ち上がって頭を下げた。
「牧野君、すまなかつたね。なかなか戻って来れなくて……。野瀬君も悪いねえ。いつも。」

「お疲れ様です、教授。」

俺も資料を机に置き挨拶をする。教授は袋からミネラルウォーター

を出し、みんなに配った。

「教授、早速ですが、昨日の依頼人から日程の相談電話がありました。」

「ああ、そうか。明日の14時はどうか、確認してくれるかい？」
「分かりました。」

牧野はいつも淡々と仕事をこなし、定時の18時にはきちんと事務所を出る。牧野は受話器を置き、先方のアポ取れました。そう言つて、時計を見た。針は18時を少し過ぎている。

「それでは私はこれで。」

お先に失礼します。牧野は事務所を出て行く。

「ああ、お疲れ様。」

「お疲れ様でした。」

教授と俺は牧野に向かって声をかける。椅子に座りなおし、資料の続きを読もうとした。

「野瀬君。」

教授が俺に声をかける。

「何でしょうか？」

「例の女性は、まだ記憶が戻らないのかね？」

「はい……。」

「もう、どの位になるのかい？」

「2ヶ月になります。どうしてそんなことを……。」

「聞くんですか？今度は逆に教授に質問をする。教授は水を一口飲んだ。」

「君は学生時代、青木君のことで夢だった弁護士の道ではなく、刑事の道に進んだね。」

「その通りです。」

「そして、今度は彼女のために刑事から夢だった弁護士の道へ方向変換した。」

「それは……。」

「その彼女は今、君のことすら忘れてしまっている……辛いだろ

うね。」

「一体何が言いたいのか、教授は。俺は黙って教授の話を聞く。」

「君は何かを決めるとき、必ずそこには何かの要因がある。青木君は君の大親友だった。それじゃあ、彼女は……。」

「教授、一体何が言いたいんですか？」

俺は恐る恐る聞く。

「いや。いいんだよ。私がそういうことを言うのは余り良いことではないね。すまなかった。」

「いえ……。はつきり言ってください。」

「……君は彼女を愛しているんだろ？」

「私が……彼女を？」

野瀬の反応に教授はコホンッと一つ咳をした。

「……やっぱりこれ以上、私が言うのはやめておこう。」

教授はにっこりと笑い、私は帰るよ。と、ゆっくりと扉の向こうへ消えていった。

「俺が……彼女を？」

そう言つて、不思議と驚かない自分がいることに驚いた。

大学生になつて初めての彼女ができた。もちろん向こうからの告白で付き合うことになった。周りの男に比べ、社交的ではなかったし、女性がどうしたら喜ぶとかそういう知識も乏しかったかもしれない。でも、その時の自分なりに彼女のことを気にかけて、悩んだこともある。1カ月程して、急に彼女から別れを告げられた。理由は『貴方といてもおもしろくない』。それから、今まで女性との付き合いは一度もない。

俺は自然と足が病院へと向かっていた。教授の言葉が繰り返し頭の中で思い出される。病室のドアの前に立つと雪乃が俺に気づき、ほんわかと笑みを浮かべる。その笑顔をじっと見つめた。今までの色んな感情が一気に蘇る。雪乃と初めて東京で会ってから彼女のこ

とがもつと知りたと思った。彼女が苦しいと自分も苦しくなった。どうにかして彼女を苦しみから救いたい、遠ざけたい。彼女の笑顔が見たい。彼女と出会ってから頭の中から彼女がいなくなることはなかった。認めざるを得ない。これは……。

「参ったな……。」

そうぼやいて、病室の彼女に近寄った。

「今日の……。」

「今日は少しいいわ。」

今日も来てくれたの？彼女は笑って言った。

俺もつられて笑った。

「そうか。よかった。」

「よく眠ったからかしら。」

彼女はそう言いながらあくびをする。俺はベッドの脇に座り、上着を脱ぐ。窓の外は夕日が落ちようとしていた。窓際には花瓶に入っただひまわりの花が首をうな垂れている。

「最近、とても眠たくて……。」

「俺に気を使わず、眠ったらいい。」

「じゃあ、お言葉に甘えて……。」

雪乃はベッドに横になった。

「ねえ、野瀬さん？」

「何だ？」

「野瀬さんは、一体私とどういう関係だったの？」

「どういう関係？」

「私が記憶をなくす前よ。」

俺は言葉に詰まった。正直に話すべきなのかどうか……。

「私は以前と変わっていない？」

「どうしたんだ？急に……。」

雪乃はベッドから出した手を、俺の前に差し出す。

「野瀬さん、お願いがあるの。手を握らせて……。」

少し目を開け、今にも夢の中に落ちそうになりながら雪乃は言った。

「・・・ああ。」

俺は鼓動が早くなるのを必死に抑え、彼女の手を握る。雪乃は握った俺の手を握り返してきた。

「貴方だと、触れても嫌だと思わない・・・。不思議ね。それどころか安心するわ。」

彼女の口元が微笑んだ。そのまま俺たちは黙ったまま、手を握り交わす。雪乃だけではない。俺も安心するんだ。俺は声に出さず心の中で雪乃に言った。外はもう暗くなっている。面会時間の終わりがすぐそこまで来ていた。目を閉じた彼女を見て、俺は手を離そうとした。

「野瀬・・・さん？」

雪乃の口元が動く。俺は手を止めた。

「何だ？」

「以前の私は・・・どんな・・・感じだった？」

「以前の君か・・・。」

俺は雪乃の手をもう一度握った。

「君は・・・『ふきのとう』のような・・・女性だった。」

そう言っていると雪乃の手がピクッと動いた。

「ふきのとう・・・。以前も誰かにそんな風に・・・言われた気が・・・するわ・・・。」

そう言った雪乃の手から力が抜け、静かな寝息が聞こえ出す。俺は彼女の手を離し、ベッドの上に静かに置いた。

「ああ。気のせいじゃない。俺が君に思ったことなんだ。君がこの手で感じ取ったんだから。」

おやすみ。上着を羽織り、俺は小さな声で眠った雪乃に声をかけ病室から出ようとした。今なら雪乃には聞こえまい。ドアの辺りでもう一度振り返り、眠った雪乃に言った。

「俺は、どうやら氷川雪乃という女性を愛してしまった・・・迷惑な話だろ？」

ふきのとう

だんだんと蝉の声も少なくなった。真夏に比べ日差し柔らかさを感じさせる。夏休みも終盤に差し掛かっているせいかな、子供たちもここぞとばかりに、遊び残さぬよう遅い時間まで笑い声が聞こえる。

俺もこのところ、とてつもなく忙しい日々を過ごしている。横を走り抜ける子供を目で追いながら、

「俺も休みがほしいもんだ。」

そんなことをぼやいてみたりする。実際に貰えるもんなら本当にもらいたい。

この時期は研修や講演会などで、教授は引っぱりだこであるがゆえ、ほとんどの依頼を俺が対応しなくてはいけなかった。正直かなり疲れている。しかし、その疲れも雪乃からのメールが来ると自然と吹き飛んだ。が、ここ何日かメールが来ない。気にはなっていた。だからといって、こちらからなかなかメールをしていなかった。久しぶりにメールを試してみる。内容はシンプル。『調子はどうだい?』送信して彼女の微笑む顔を想像する。すぐに返信は来ない。俺は鞆に携帯を入れ事務所に向かって歩いた。

雪乃を愛していると気がついてから、少しばかり周りの女性を見るようになった。決して女漁りをしている訳ではない。女性を見てはつくづく思うこと。雪乃はなんていい女なんだろうかと。何がいい女なのかと言えばよいのか、自分でもよく分からない。多分だが、俺がただ雪乃を愛しているからという理由だけなのだろうと。恋愛経験の少ない自分が偉そうなことは言えない。でも、俺と雪乃の間には他の誰も決してない繋がりがある。いや、今となっては『あった』というべきなのだろう。秘密の共有者という絆。雪乃を愛した理由は決してその『絆』ではない。しかしきっかけは確かにそ

ここにあった。共有することで彼女の弱い部分や強い部分、人一倍人を思いやる精神・・・色々な雪乃に出会い、多分・・・雪乃のすべてを自分も知らない間に愛してしまったのだ。

鞆の中の携帯を見る。返信はまだ来ていない。携帯の時刻は16時を少し回っている。

「おかしいな・・・。」

まだ、そんなに遅くない時間だ。検査なんてこんな時間にあるはずがない。俺は何故かとても不安に駆られる。

「何か・・・あったのか？」

最近の雪乃は少し様子が変だった。夢を見たり、言っていない事を知っていたり。力が少しずつ戻ってきている、それは感じていたが。「そういえば・・・最近やけに眠たいとか言っていたな。」

俺は更なる不安に駆られ、事務所に電話をかけた。

「ああ、牧野さん？」

「はい。」

電話の向こうから素っ気無い返答がある。

「申し訳ないが、今日は直接帰らせてもらうよ。」

「分かりました。教授は今日も戻って来ないそうです。」

「明日の相談内容の資料だけ俺の机に置いてくれるかい？」

「野瀬さんも大変ですね。分かりました。明日は3件ありますので。」

「ああ、分かってる。内容は周知済みだ。それじゃ、お疲れ様。」

俺は携帯を切り、病院へ向かって歩いた。

病院に着くと俺の胸の中は更に不安が襲ってくる。いつもの廊下を足早に歩き、雪乃の病室が見えそうな場所まで来た。病室の更に向こうにある談話スペースの椅子に雪乃の父親の姿が見える。首をうな垂れた状態で静かに座っている。俺は雪乃の病室を通り過ぎ、父親のもとへ歩いた。

「こんばんわ。」

俺が挨拶すると父親がゆつくりと顔を上げた。

「君は・・・野瀬君だったかな。」

「あ・・・はい。」

俺は、失礼します。そう言っただけで父親の横に腰掛けた。父親はゆつくりと息を吐いた。

「雪乃さんは・・・。」

「雪乃が生まれた日、クリスマス・イブだ。私と家内は神様からのクリスマスプレゼントだと喜んだ。なんて幸せなクリスマスなんだと・・・。そんなに大きな体ではなかったが、よく泣く子だった。」
父親は目頭を指で押さえた。

「いつからだろうか。雪乃が私達親を避け始め、心を閉ざしてしまった。何がいけなかった・・・。」

父親の肩が小さく震え始めた。

「小さい頃はあんなに良く笑う子だったのに。いつからか笑わなくなった。どうしたらいいのか私達にもわからなかった。でも、どんなに私達を嫌っても、私も家内も3人の娘を愛していた。それなのにどうしてこんな・・・。」

父親は言葉につまる。雪乃の秘密はきつと、雪乃だけの苦しみではない。秘密で雪乃が苦しむと違う形で雪乃の周りの人間を知らない内に巻き込んでいるのだろう。雪乃を愛する人間は特に。この親もきつと長年苦しんで来たに違いない。今の俺が父親に出来ることは・・・。雪乃さんはちゃんと分かっています。」

俺の言葉に父親が涙を流した顔を上げた。

「私が刑事の頃、雪乃さんの事情聴取の日です。聴取の前に少し話をしました。ご両親が自分の誕生を喜んでくれた、私は望まれて生まれてきたんだ、彼女は笑顔でそう言っていました。雪乃さん自身もご両親とちゃんと向き合っかけてかけがえなかったんだと思います。」

「そうか・・・。君にそんなことを・・・。」

「はい・・・。」

そう言つて、俺は椅子から立ち上がった。彼女の笑顔が早く見たくなつた。

「野瀬君……。雪乃はまだ……。眠りについてしまったよ。」

「……………!」

俺は頭が真っ白になる。

「今、何て……………」

「昨日から、雪乃が目を覚まさないんだよ。」

「昨日……………」

「3日程前から少し様子が可笑しかった。じつと物思いにふける時間が長いと思えば、いつの間にか眠っている。その繰り返しだ。何か言つたと思うと『ふきのとう』しか言わない。」

「ふきのとう?」

「ああ……。眠りにつく最後の言葉は『野瀬さん、ふきのとうに会いに行つてきます。』そうつぶやいたらしい。」

「ふきのとうに……。会いに……………」
俺はそれを聞いて胸の奥が一気に熱くなる。ああ、そうか、俺はある確信をした。

「雪乃さんに会つてきます。」

俺は父親にそう言つて病室へ向かった。ドアを開けるとベッドには眠つた雪乃がいる。少し笑みを浮かべているように見えた。俺は椅子に腰掛け、彼女の手を握り、その手に静かにくちづけをする。涙が込み上げてくる。

「ふきのとうには会えたか……………」

俺は笑顔で雪乃に向かってささやく。そして手をぎゅっと握り締めた。

「君は……。君自身に会いに行つたんだな。大丈夫だ。ちゃんと乗り越えて戻つてくれるさ、雪乃……………」

夢？

暗い。

ただ暗いだけの、ここは……どこ？

何も見えない。

怖い。

誰か……。

「助けて……。」

『雪乃』

聞き覚えのある、優しい声……。

誰かが私を呼んでる。

『雪乃』

「誰？」

『ごめんね。雪乃。』

「誰？ねえ……！何故謝るの？」

私は知ってる。

この声を。

『辛い思いをさせて、ごめんなさい。』

「辛い思い……？」

『でも、貴女には乗り越えてほしい。私が死んだことも。そして……』

『……』

「死んだ……？」

『貴女の力のこと……』

「力……。」

『雪乃。いつまでも貴女のこと、大好きよ。私の可愛い妹……』

「いもう……と……。あ……ああ。」

私は知ってる。

この声を。

「姉……姉さん……！」

『思い出してくれたのね。ありがとう、雪乃。』

「姉さん！どこにいるの？見えないわ！姉さん！見えないのー！」

『雪乃、ごめんなさい。辛い思いをさせてしまって……。』

「ねえ！どこななの？姉さんに会いたい！」

『私はもう……。死んだの。』

「死んだ？うそよ！ねえ、嘘よ！」

『貴女は知ってるはずよ。思い出して。』

「そんなの嘘よ！思い出す？何を？……。嫌っ！思い出したくない！」

『思い出して……。雪乃。私の為に。そして野瀬さんの為に……』

『

「野瀬さん……。？野瀬……。」

野瀬さん……。

「私……。」

『そう、思い出して。』

知ってる……。

野瀬さん。

「……。ふきのとう。」

【ふきのとうみたいな女性だ】

「ふきのとうみたいなの……女性……。私……。」
知ってる。

「姉さん……。！私……。っ！」

『雪乃、いつでも貴女を見守ってる。私のかわいい妹……。』

「姉さん……。ごめんなさい……。助けてあげられなくて……」

『

私……。私は……。

「でも、私、行かなくちゃ！」

《行ってどうするの？》

「えっ……？」

《また、辛い思いをするだけでしょ?》

「辛い思い……。」

《忘れてしまった方が楽なのよ。》

「楽……。」

《そう。行くことなんかないの。もう辛い思いは嫌でしょ?》

「辛い……辛いのはもう嫌……。」

《それでいいの。何もかも忘れてしまいましょ。》

「何もかも……忘れる?」

《そう。ずっとここにいればいい。戻っても一人ぼっちよ。》

「一人ぼっち?」

一人ぼっち……?

【つらいことや苦しいことでどうしようもない時は秘密の共有者に何でも相談すること。】

違う……!

《貴女は一人ぼっちよ。だから……》

違う! 違う! 違う! 違う! 違う! 違う! 違う! 違う! 違う! 違う!

「違う! 私は一人ぼっちなんかじゃない。野瀬さん! 私には貴方がいるもの!」

ひまわり

俺は面会時間終了まで雪乃の手を握っていた。彼女の白く細い指に、太くごつごつした自分の指を絡ませて。少しでも多く、広く、雪乃の体の一部に触れていたかった。自分の想いが残らず彼女の夢の中へ届くようにと。

こうして雪乃を見ていると自然と涙が込み上げてくる。確証はないが彼女はまた、夢の中できつと自分自身と戦い、辛い思いをしているに違いない。そう思うとまた、目頭が熱くなる。

「俺はこんな涙もろかったか？」

自分は他人の感情に振り回されず、何事にも的確に判断できる人間だと思っていた。自分以外の人間がどんなにつらい目に合っても、今まで涙など流したことはない。自分の感情をこんなにも抑えられなかったことなどないのに。

「それだけ君は俺にとって特別なんだろう。」

面会終了のアナウンスが聞こえてくる。俺は彼女の手をベッドへ戻し、その代わりに雪乃の頬に静かに触った。雪乃の体温がまた手を伝ってくる。俺は雪乃に静かに話しかける。

「明日、必ずまた来るよ。君は大丈夫だ。俺は信じてる。」

目の前には主婦とその弁護士。俺の横にはサラリーマンの男性。内容を聞いて思わず首を振った。これは呆れて振った首。やってられない……。

今日3件目の相談は人身事故による賠償責任問題だった。車と自転車との接触事故。自転車で乗っていた主婦は軽い打撲だったが、相手の対応が悪いなどの内容で運転手側を訴えると言って聞かないという。

俺は運転手側の弁護の担当だ。話を良く聞けば、青信号で直進中の

車にブレーキもかけないまま主婦の乗った自転車が左側から飛び出してきたというもの。目撃者も何人かいた。しかし主婦は自転車と自動車なら当然自動車の過失が大きいに決まっていると聞いて聞かない。主婦側の弁護士も半分呆れている。俺は主婦に言った。

「先日このような事故がありました。交差点で直進の車が右折した原動付バイクと衝突。車側の車線は青信号でした。警察の現場検証の結果、自動車対原動付バイクは25対75で原動付バイクの過失が大きいと判断された。原動付バイクの持ち主は保険に加入しておらず、車の修理代を自腹で払わなければいけなかった。小さな額ではありません。このように、今は事故に対して、必ずしも車が大きな過失を問われるわけではないんですよ。」

俺は1回言葉を切り、相手の主婦をじつと見た。主婦側の弁護士は目を閉じ腕を組み、じつと黙っている。俺は先を続けた。

「今回あなたが信号無視をしてこのような事故が起こったことは何人も証言ではつきりと分かっています。しかし、こちらの車の修理はこちらの保険で賄うと言っているんです。もし、裁判をするこゝとなれば、貴女の過失が大きいと判断されるのは目に見えています。そう判決が出た場合、裁判費用、車の修理費諸々、出費は免れません。それでも裁判をされますか？」

こちらは構いませんが……。そう最後に付け加えた。俺の話に主婦が青ざめたのが分かる。先程までの威勢はどうしたものやら……。俺は相手の弁護士をチラッと見た。目を開いた弁護士は俺に少しニヤツと笑った。

結局主婦が折れ、示談での解決となった。

「当たり前だろう。自分が悪いのに……。」「
こんなこと言っちゃいけないが、時間の無駄だ。俺はブツクサ言いながら建物から出る。今日の予定はこれで終了。足は既に病院に向かっていた。」

雪乃の病室に入ると彼女は昨日のまま、眠っている。窓にはレース

が引かれ、太陽の光が直接当たたらぬよう配慮されている。窓際にあったひまわりがなくなっていた。俺はいつもの場所に座った。

「お前、来てたのか。」

背後から突然声がして、俺は振り返る。

「主任……。」

刑事の井出がそこに立っていた。手にはひまわりがささった花瓶。俺はハッとする。

「……ひまわり。主任だったんですか。」

突然手に持ったひまわりのことを聞かれ主任は、ああ、これか？とひまわりを見た。

「いや、彼女の意識があつた頃、何かほしいものを聞いたらな、ひまわりの花を買ってきてほしいってさ。俺が花を買うんざかなり似合わんが、まあ、彼女の頼みだし仕方なく買ってきた。」

主任は俺の横を通つて窓際へ向かう。

「これをここに飾つた時、彼女は嬉しそうにこう言つてたよ。『この花はある人に似てる。その人がいない時、ひまわりが近くにあれば、あんなに寂しくない。あんな人がいつもそばにいるように。』ってな。」

井出はそう言つて、窓際にひまわりを飾つた。

「彼女また……眠つてしまったな。」

窓の外をレース越しに見て井出は言つた。

「もうそろそろ枯れてる頃だと思つてな。来る途中で買って来たんだ。これで彼女が目を覚ました時に、寂しくはないだろう……。」

「大丈夫ですよ、彼女は。」

「……。」

「近い内に目を覚ますはずです。」

「そうだな。お前が言うんだから間違いないだろう。」

そう言つた主任は、俺を外へ誘つた。俺は頷いて主任と病室を出て行つた。

病院の外の喫煙所。雪乃が最初に目を覚ました日、俺が煙草を吸い、雪乃の病室を見上げた場所だ。近くのベンチに腰掛け、二人同時に煙草に火をつける。缶コーヒーを片手に。

「お前とこっやっつてコーヒーを飲むのは久しぶりだな。」
主任は少し笑いながらいった。

「すみません。色々と迷惑をかけてしまいました。」

「もう謝るな。それより、どうだ？弁護士のはうは。」

「おかげさまで、だいぶ慣れてきました。まだまだ勉強しなくてはいけないことも多いですが。刑事も弁護士も大変なのは同じですね。」

「そうだろうよ。人を相手にする仕事は同じさ。」

「迫田は・・・元気にやってますか？」

「ああ。お前が辞めた当初はしょぼくってたがな。今日も聞き込みにいってるはずだ。」

「そうですか。迫田にも悪いことをしました。」

「あいつのことは気にするな。あの性格だ。」

「ですね。」

俺たちは声を出して笑った。久しぶりに心に気持ちいい風が吹き抜けた。

「彼女のところにはよく来るのか？」

煙草をふかしながら主任が静かに言った。

「週に2〜3日位です。忙しくて少し長いこと来てなかった間に眠ってしまいました。」

「そうか。まあ、お前はもう刑事じゃない。ここに来ても何の問題もないさ。」

「主任・・・。」

「俺は、刑事としてきている。悪く思わんでくれよ。」

「分かっています。被害者遺族を気にかけるのは当然ですから。」
主任の携帯が鳴る。わかった、すぐ行く。主任はそう言って残った

コーヒーを一気に飲んだ。

「現場から電話だ。行くよ。」

迫田からだ。ニヤツと笑って主任は立ち上がった。俺も立ち上がる。

「ありがとうございます。」

そう言った俺に、主任は遠退く足を止めて言った。

「彼女の『ひまわり』は、きっと・・・お前のことだろうよ。」

夢？

ここには誰もいない。
でも

私は一人ぼっちなんかじゃない……。
そうよ。

確かに以前は一人ぼっちだった。
ううん。

自分で勝手にそう思いこんだ。

自分の力を憎んで

なんで私だけが……。って。

ずっと自分自身に負けて

それを力のせいにしてた。

でもあの日

野瀬さんに出会った。

夢の中で。

怖いと思った。

私の力のことを知られることが。

自分のせいで

こんな私になってしまったことを

認めなくてはいけなくなるのが。

夢で見た姉を

助けられなかったと

責められることが。

実際の彼は

とても大人だった。

精神的にも

私に対する対応も。

そして

彼が私に対して抱いた感想。

『フキノトウみたいな女性』

一人ぼつちとか寂しいとか

そんなことを一つも含まない言葉。

本当に嬉しかった。

いや、嬉しいなんて一言では済まされない程。

私の秘密を知っても

私を軽蔑しないまっすぐな瞳。

そして

共有者になる為の彼が私に出した条件。

まさにあの言葉が

私は一人じゃないと教えてくれた。

私の言葉や行動で

彼が笑ったり不機嫌になったり

そんな些細なことが

私に力をくれた。

初めて、逃げたくないと思った。

姉の為に

自分の為に

そして

野瀬さん、貴方の為に。

私がフキノトウなら

貴方はひまわりのような私の太陽。

野瀬さん。

私、姉の写真の前で

姉に言ったの。

助けてあげられなくてごめんなさい。

姉さんの為に

野瀬さんの為に

今、私ができること。

私の力でできること。

逃げずに立ち向かうからって。

写真の姉が笑ったような気がしたわ。

私は逃げなかった。

姉の事件も

そして

貴方を縛るあの事件も。

逃げずにちゃんと向き合った。

貴方に手紙を書いている間

私は不思議と落ち着いてた。

そう。

姉の為に自分ができることをしたこと。

そして

貴方に対する自分の気持ちに

はつきりと気付いたこと。

あの公園で貴方に触れた瞬間から

私はきつと

貴方を愛していたんだわ。

ううん。

夢で貴方と会った時から

私は貴方に惹かれてた・・・。

私にも誰かを心から愛することができるんだ。

だって、ほら・・・

今も貴方の想いがはつきりと分かる。

伝わってくる。

私なら乗り越えられる・・・

大丈夫だって。

私は一人ぼっちじゃない・・・。

大丈夫。

戻らなくちゃ。

本来の場所へ。

貴方のいる世界へ。

早く貴方の顔が見たいから・・・。

愛する恐怖

この道も今日で何回目だろうか。面会時間を終え家路に向かう。病院から自宅までは歩いて20分足らずだ。刑事の頃の寮を出た後、病院の近くに引っ越しをした。すぐに彼女のもとへ行けるように。

家の近くのコンビニへ入る。夕食はこのコンビニで済ませることが習慣となっていた。袋を片手に家に着き、鍵をテーブルに置いて手を洗う。床に座り袋から弁当を出した。割箸を口にくわえ割り、一人黙々と弁当を食べる。食べながら思い出すのは雪乃が作ってくれた『煮込みハンバーグ』。刑事になってから手料理の味を忘れてしまっていた俺に、手料理とはこんなにも美味しいものだと思いい出させてくれた。

雪乃が俺に触れ、俺の好物を知った時、どう思ったのだろうか。子供みたいだと思っただに違いない。

「そう考えると、結構恥ずかしいな。視られるというのも。」

雪乃が言う『人に視られて嫌なこと』とはまた違う。俺にとっては雪乃限定で『視られて恥ずかしいこと』に相当する。

「別に視られて彼女が嫌な思いをすることはないが……。」
最後のご飯を口に入れぼんやりとそんなことを考える。動かす口がピタッと止まる。

「いや……。待てよ……。」

そうだった。雪乃にはまだ知られていない俺の感情があった。

「まずい……。雪乃が知ったら……。」
良く噛み切れていない状態で口の中のものを思いつきり喉に押し込みムセた。急いでペットボトルのお茶で流し込む。そのまま1本お茶を飲みきり、息をついた。

「雪乃が俺の想いを知ったら……。」
29年生きてきた中で一番の不安に駆られた。雪乃への俺の気持ち
を彼女が知ったら、雪乃はどうするのだろうか？記憶を取り戻し、

以前と同様に俺を『秘密の共有者』として認めてくれるのか？もしかして俺と距離を置くのではないか？二度と会えなくなるのではないか？

迂闊だった。恋愛経験の少ない俺はそこまで考えていなかった。ただ、『秘密の共有者』としていつまでも雪乃と関わられる、そう思っていた。

「もしかしたら・・・俺の気持ちを知って、別の奴を『秘密の共有者』にする・・・なんて事に。」

何という恐怖感なのだ。自分の中の恋をする男の感情・欲情が一気に湧き上がる。自分以外に雪乃の秘密を知られたくない。永遠に俺達二人だけの秘密であってほしい。色んな想いを一気に頭の中に巡らせ、落ち着け、そう自分に言い聞かせる。俺が雪乃を苦しめる要素になってはいけない。絶対にそれだけは避けたい。

「この想いは、俺だけの秘密にせねば・・・。」
俺だけの秘密。なんて苦しい秘密なのだ。今、本当に雪乃の気持ちが分かったような気がする。苦しい秘密を抱える者の本当の苦しみ。重い胸の錘。胸を圧迫する程の不安。そして、誰かに知られる訳にはいかないという自分との戦い。部屋の中、いや世界中の空気が一気に重くなつたように感じた。

ベッドに横になり、くわえ煙草をする。家で何かを考える時の俺の癖だ。天井に上がる一筋の煙をじつと眺めながら頭の中は愛するという恐怖感で一杯だった。

「雪乃が今度目覚めた時、彼女は力を、記憶を取り戻す。」

彼女はきつと俺にいつかは触れることになる。そして・・・。

「俺の心の中を読み取る・・・。」
雪乃への気持ちもすべて。

「俺は・・・。」

俺は、雪乃のそばにいてはいけない。そうだ。雪乃は自分の運命を受け止めた。今から直面するであろう苦しいこと、辛いこともきつと乗り越えていける。俺がいなくても。

「今の俺が、彼女の為にできること……。」
それは、彼女の前から姿を消すこと。

「今度目が覚めたら、雪乃にはきつと新しい人生が待っている……。」

俺がそれを邪魔してはいけない。俺は決心する。明日で彼女の病室に行くのは最後にしよう。

今日は仕事が休みだった。一週間分の洗濯物を済ませ、普段着に着替えた。お昼近くになっていたせい、外にでると子供連れの主婦やピザの宅配中のバイクなどが世話しなく行き来していた。太陽が地上を暑いくらいに照らしていた。が、俺の中にはうつすらとか日が差し込まない。まるで黒一色のオセロ口盤のようだった。病院への通り道の花屋へ入り、ひまわりを5輪買う。

病室へ着くとまず、花瓶を持って購入してきたひまわりを主任が昨日飾ったひまわりに加え、窓際へ置いた。いつもの場所に腰かけ、雪乃の顔を見つめたあと、何故か震える手で雪乃の顔・口・髪の毛を静かい触る。

「今日でお別れだ……。すまない。共有者として君の悩みや苦しみを……。もう聞いてあげられない。結局俺は君に偉そうなことを言いながら、自分の気持ちに君にばれるのが怖くて逃げるんだ。許してくれ。」

俺は雪乃のおでこにキスをする。ポケットから封筒を取り出し、雪乃の枕元に置いた。

「目を覚ました時に読んでくれ。」
俺が雪乃の前からいなくなることを、決して彼女に誤解されてはいけない。彼女が嫌いで、その力のせいで俺がいなくなったのではないということ。自分の気持ちだけは悟られないような内容で。そうしないときつと雪乃はまた苦しむに違いないから。

「君はもう大丈夫さ。じゃあ……。」

俺は雪乃に背を向け病室を出た。そして少し歩いて立ち止まる。

この場所で立ち止まったのは2度目。

たくさん言いたいことがある。でも言ってしまったら後戻りが出来なくなる。溢れる涙を誰にも見られないように隠す。人を本気で愛することがこんなにも怖く、辛く、そして幸せなことだと初めて知った。

「今からの君は・・・きっと幸せだろうよ。」

門出

雪乃に別れを告げて一週間が経つ。いや、この表現は間違っている。『雪乃から逃げて』これが正しい表現だろう。29年の人生でたくさん人間と出会ってきたが、こんなに短時間で人間とは人を愛せるものだったんだ、雪乃から俺は色んな事を教わった気がする。俺は相変わらず忙しい毎日を過ごしている。出来る限り、雪乃のことを考えまいと、今まで以上に仕事に集中し、遅い時間まで資料に目を通す。しかし、こんな風にふと気がついたときには、頭の中が雪乃のことで一杯になる。まだ目は覚めていないのだろうか、今頃どうしているのだろうか？と。カップに入ったコーヒーを仕事机から持ち上げ、窓から暗くなつた外を眺める。秋の京都は紅葉見物客で遅くまであちこちに火が灯り、賑わっている。入り口の扉が開く音が聞こえ、俺はゆっくりと振り返った。

「野瀬君、まだいたのかね？ごくろうさん。」

教授が少し疲れた顔で俺に微笑む。

「教授こそ、遅くまでお疲れ様です。」

「いや、ほんとに参ったよ、今日は……。」

そう言つてソファアにドカッと腰をかけた。俺は教授にコーヒーをいれ、ソファアへ歩き、教授の前のソファアへゆっくりと腰を下ろす。教授の前にコーヒーを置いた。

「ああ、ありがとう。今日は講演会だったんだが、今日の傍聴者はつわもの揃いだったよ。なかなか帰してくれなくてね。」

「大変でしたね。」

「しかし、明日から少し余裕が出来そうだ。」

そう言つて野瀬のいれたコーヒーを美味しく味わった。

「しかし、また急がしくなるんでしょう？明日からは少し休養を取られてはどうですか？」

「そうしたいんだが、ね。」

教授は一呼吸置いた。

「野瀬君……。」

「はい。」

「実は、事務所を九州へもう一つ作るうかと思うんだ。」

「九州……ですか？」

俺は何気に教授の話を書く。教授はチラツと俺を見た。

「ああ。それでだ。君に……その所長を務めてほしいと思ってるんだが……。どうかね？」

教授の突然の言葉に飲みかけたコーヒーを噴出しそうになる。

「私……ですか？ いや……でも……私はまだ弁護士になって日が浅いですし……。」

「確かにそうだがね。弁護士になってからの君の評判は、たいしたもんだよ。弁護士会までその噂は流れているようだ。弁護士はたくさん事例をこなし、経験を積まなきゃいけない。所長になると、それは今までと何も変わらないんだよ。」

「しかし……。」

「彼女が……気になるのかね。」

教授が静かに俺に問う。俺は小さく息をつく。

「いえ……。彼女は関係ありません。私はもう……。」

会いに行くことはありません。俺も静かに言った。

「会いに行かない？ どうしてかね？」

「いえ、特に何もありませんが……。」

教授は俺をじつと見る。手に持っていたカップを静かにテーブルに降ろした。

「まあ、言いたくなければ、これ以上は聞かないが……。それなら問題はないだろう？」

「……。」

「すぐに返事をくれとは言わんよ。少し考えてみてくれないか？」

「……はい。わかりました。」

教授はニコツと笑い、

「さて、今日は疲れたからこれで失礼するよ。」

そう言つてドアに向かつて歩き出す。俺はソファから立ち上がり頭を下げた。教授の姿が見えなくなったのを確認し、再度ソファへ座りなおす。

「九州か・・・。」

俺はポケットに手を入れ目を閉じた。目の裏に浮かぶのは雪乃の顔。俺はもう雪乃には会わないと決めたのに、この一週間一層雪乃のことが頭の中にグルグルと回っている。

「この際、京都から出て、遠く離れた地に行くのもいいかもしれないな。」

多分この先、ここにいれば彼女に対する想いは消えることはない。いや、離れてもそうだろう。しかし、近くにいた方が諦めもつく。彼女も目が覚めて、退院したらきつとまた東京へ戻るに違いない。

「・・・痛いな。」

俺は胸を押える。胸の奥のどの部分が痛むのかわからないが、雪乃と会っていないこの一週間、ずっと個の痛みをおぼえている。分かっている。すぐに治らない痛みだということは。

「・・・明日、教授に返事をしよう。」

気が変わるといけない。早い方がいい。俺はソファから立ちあがり、重い足を引かずるようにドアに向かつて歩く。

「それでは九州新事務所の設立と、野瀬君の所長就任を祝つて・・・。」

乾杯！教授の乾杯音頭に合わせ全員でグラスを宙へかざす。所長の話を買った次の日、俺は教授へ了承の返事をした。今日はそのお祝い（？）ということで俺がこの事務所に来て、初めての飲み会。珍しく牧野も参加している。

「牧野さんも、飲み会などは参加する方なんですか？」

別に嫌味を言っているわけではない。いつも18時にはきっちり帰

る牧野が20時にここにすることが不思議だった。

「いつもではないですが……。たまには参加しないとうちの奥さんが逆に心配するんでね。」

「そうなんですか？珍しいですよ、飲み会に行かないと心配する奥さんも……。」

「余りこんな話はしないんですが、女房は体が弱いんです。私が18時に帰るのは子供を保育園へ迎いに行くからです。女房なりに悪いと思つて気を使つてるんですよ。自分のせいで、私の時間を費やしているんじゃないかってね。だからたまにはこういう場所にも参加して安心させないと、体に負担がかかりますから……。」

牧野はそう言つて、グラスの中のビールを一気に喉に流し込んだ。

「正直、意外でした。奥さん思いなんですね。」

俺もグラスを空け、瓶に手を伸ばす。取るうとした瓶を牧野が先に取り、俺のグラスに注いだ。

「女房は私が二人目の旦那なんです。初めの夫は酒癖が悪くて、女房への暴力がひどかったそうです。お腹に子供がいたそうなんです。そのせいで流産しましてね。私と結婚してからもその後遺症で余り体調が良くなかったのに、私の子供を産むことだけは頑として譲らなかつた。思えば、結婚した当初から女房の私への気遣いは始まつていたんですよ。」

牧野は自分のグラスにビールを注ぎ、また一気に飲み干す。俺は黙つて牧野の話聞いた。この男も本当は色んな事を胸に抱えているに違いない。

「しかし、私はこんな人間です。うまく相手に気持ち伝えられない。多分、たつた一言『愛してる』そう言えたら……。」

牧野は苦笑いをする。

「変な話をしてしまいました。すみません……。」

「いえ……。」

牧野の言葉が何故かすごく俺の心に響いた。

「本当に、奥さんを愛しているんですね……。」

「ええ・・・まあ・・・。」

恥ずかしいのか、牧野は頭をポリポリつと掻いた。

「私は昔から女性とは縁がありませんでしたから。女房と出会ったことは私にとつて、奇跡なんです。」

「奇跡・・・ですか。」

「そう思わないと何だか罰があたる気がします。」

牧野は今度は一口ビールを飲んだ。うつすらと柔らかな表情でグラスを見つめる。

「女房にプロポーズしたあの時の勇氣・・・。私にはあれ以上に怖いものはありませんから。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9361q/>

秘密

2011年10月8日18時34分発行